柳の雑記

麻生路郎★主宰

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和十八年七月一日發行　第十八卷第七號
（毎月一回一日發行）

七月號

Pensoj flugas trans
la land-limon

★お時間の少ない方には便利で直ぐお役に立つ

職業洋裁 自由教室

（大阪市南區綾谷西ノ町十）

教授 は山中吉子先生のヴァレンタインシステムで御指導いたします。

教材 は初歩の方は御持参の事、但し新しい生地でなくとも結構、研究の足りた御上手な方にはブールブーの店から教材をお渡しいたします。又相當の報酬も差上げます。

卒業 は六ケ月（六〇回以上出席の方には美麗な卒業證書を贈呈）

教授料 は月謝制と切符制の二種

申込・出席券 其他御問合せは下記へ。

ブールブー洋裝店

大阪市南區心齋橋一丁目四四（そごう北横）

敬神崇祖

伊勢大神宮、熱田神宮、橿原神宮、神武天皇御陵 をはじめ奉り數多くの御陵墓、枚岡神社、奈良春日神社、石上神宮、大和神社、大神神社、吉野神宮、丹生川上神社（上・中・下社）、談山神社等の官幣社ほか御由緒深き神社への光榮ある參拜路であります

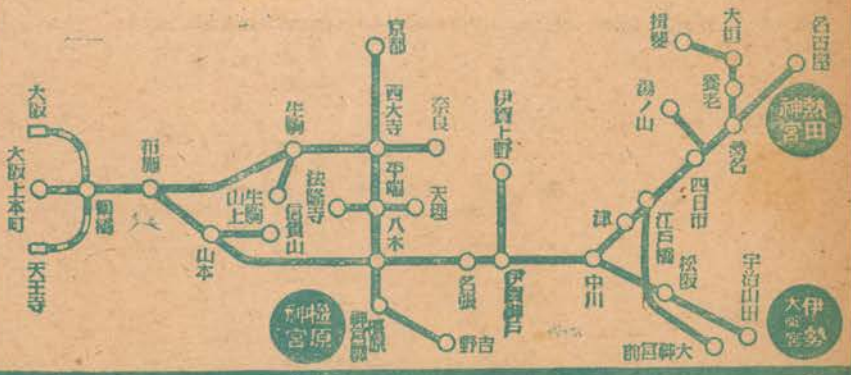
心身錬成

神武天皇大和御平定の聖蹟をはじめ、飛鳥奈良朝時代の文化を物語る遺蹟下りては吉野朝覇者興亡の史蹟、奈良、吉野、多武峯、室生寺、赤目四十八瀧、香落渓、窪之谷の名勝に一般同胞練成道場としてのハイキングコースがあります

信貴生駒縱走、平城史蹟めぐり、飛鳥史蹟めぐり、多武峯より石舞台・岡寺へ、三輪より石上神宮・天理へ、赤目四十八瀧より香落渓へ、 枚岡公園・生駒山上・摂河泉展望コース、その他奈良、吉野、生駒山脈を中心として數多くの優秀コースがあります

重要交通路

大軌と參急電鐵とが合併して全營業路線は四三八粁、これに直營バス及傍系の電車バスを加ふる時は一千粁を超え、大阪奈良三重愛知岐阜の一府四縣に跨り交通産業に緊密な關係を有する重要な任務を擔うてゐます



関西急行鐵道

（旧名 大軌・參急電鐵）

戸田孤篷著 題字・京大教授 本庄榮治郎博士

川柳 二千六百年史

序・麻生路郎 跋・宮本又次

★本誌十七卷一月號より七月號まで連載好評を博し左川柳二千六百年史に、大增補して上梓！

定價九拾錢 送料六錢

川柳と漫畫

累卵の遊び

麻生路郎著 柴谷柴舟畫

★特價 八十錢（送料）九錢

藤村誠一著

詩人複眼

序 麻生路郎 百田宗治

跋 吉川則比古 裝幀 田村孝之介

★高鷲亞鈍が著者のペンネームだと云へば本誌讀者にはこの本が持つ魅力を想像することが出來やう。

定價壹圓（送費六錢）

發行所 堺市出島海岸通二丁一八二番地 不朽洞

振替大阪三〇三九二番

水郷大洲

大洲は伊豫の京都だと云はれてゐる。中江藤樹先生を育てた山紫水明の地。

肱川だ小富士だ大洲
泊り也

この鮎は藤樹先生の
喰べた鮎

——川添ひの旅舎にて——

路郎

川柳雜誌 七月號目次

表紙……（ステッキ）……福井哲

水郷大洲……麻生路郎……（一）

國栖の翁の舞……西田艸樂……（八）

月評川柳一ト筋……蔦乃・丹路・鮎美・其人・春巣・青兒・ナート……（一八）

旅の手紙……高鷲亞鈍……（九）

武玉川四編研究（二〇）……梅本塵山・森東魚・蛭子省二……（二三）

街に住めば……高橋かほる……（二六）

吟行地調べ　**奈良篇**（五）……麻生路郎……（二）

一涙居を訪ふ……長谷川岬……（一四）

雲の列傳……岡田某人……（二四）

岡山から……鈴木九坡……（二四）

堂篇川柳　**一人息子と一人娘**……小畑自由期……（二二）

床屋の話……大山露斗……（二三）

柳路居苺狩……麻生蔦乃……（二八）

川柳　**世界史**（五）……戸田孤篷……（二三）

★

近作柳樽……麻生路郎選……（一四）

川柳塔……麻生路郎選……（一四）

同舟近詠……諸家……（二六）

一路集　慰問袋……清水史路選……（二八）

各地柳壇……（三〇）

川協……（二八）……柳界展望……（三五）

社關係の人々……（三六）……後記……（三五）

吟行地調べ 奈良篇（五）

麻生路郎

（23）竹柏樹林

★奈良には竹柏の自然林がある。竹柏は亞熱帶の植物で、我國では臺灣をのぞいては珍らしいものであるが、その面積は十四町歩餘もあるそうだ。

★春日神社境内竹柏樹林は大正十二年に天然記念物として指定せられた。

★竹柏（なぎ）を句にすることは藤よりも更に難しい。

亞熱帶の鳥を忘れた竹柏　林　霞乃

奈良のなぎ一體どこにありまんね　路郎

柏などは問題にせず春日抜け　同

奈良の遊覽客の多くは竹柏の存在を無視してゐる。なぎは闊葉樹であるが、葉脈は網狀でなく平行してゐるのが特徴である。

（24）春日神社

★奈良驛から東へまつすぐに十三町ほど來たところに、木造の大きな丹塗の鳥居がある。これが春日神社の一の鳥居で、仁明天皇の承和三年に創立されたもの、高さは二丈二尺八寸、表間は二丈ある。この一の鳥居から奥へ春日本社、御蓋山までが春日神社の境内である。本社に近いところに二の鳥居があり、そのあたりから石燈籠が多數に立ちならんでゐる。

★春日神社は官幣大社であり、全國神社中、第一流の神社である。世界では「春日さん」で通つて居る。建甕槌命（第一殿）經津主命（第二殿）天兒屋根命（第三殿）比賣神（第四殿）以上四柱の神々が鎮座ましますのである。

★春日神社は朝廷の外戚である藤原氏の氏神として一千二百年前に奈良の都の建設と同時に創立せられたのである。

★春日神社には次に述べるやうな面白い傳説がある。

昔春日明神が常陸の鹿島から移つて來られる時に、鹿と乞食をつれて來られ、儂はどうでもいゝから、鹿と乞食に物をやつて呉れるやうにとおつしやつた。

そこで春日神社には、昔からお賽錢箱がなく、雪消の澤に、三百人も這入れる乞食小屋があつて、

「春日ハンにはお賽錢箱がありまへん、どうぞ乞食にやつて下ハれ」

と云つて、參詣人の袖にすがつたものだそうな。

その後、世が變つて春日の乞食も居なくなつたが、明治二十年ごろまでは、多少殘つてゐたそうである。

乞食が居くなつたので、神意でお賽錢箱をお置きになつたものか、どうか、そこまでは知らないが、春日神社にお賽錢箱が出來たのは近年のことらしい。いささか事務的な云ひ方ではあるが、賽錢を處理する上に、矢張りあつた方がいゝのであらう。

それにしても、あれだけ參詣人の多い神社に、乞食が自然に居なくなる筈もなからう。奈良は奈良の奈良でなく、觀光都市として日本の奈良であるといふ考へ方から、縣の取締で乞食を一掃したものらしい。公園の中に洋館を建てさせず、縣廳や裁判所さへ風雅な日本建築で押し通してゐるところから見ても乞食の存在が許されなかつたのに違ひない。乞食は居なくなつたが、鹿は春日の神鹿と呼ばれて、昔から境内に放飼ひされてゐて今なほ參詣人に養はれてゐる。

★春日の句では

青丹よしガルボに似たる巫女の顔　孤蓬

春日さんから一刀彫りへ一寸寄り　霞乃

春日道鎌足さんに出遇ひさう　路郎

矢張りその賽錢箱は要るの也　同

（25）春日の萬燈籠

★春日神社に奉納されてゐる夥しい燈籠を大別すると石燈籠と金燈籠との二種類で、その外に瀬戸物の立燈籠が一基と、木造の釣燈籠及び立燈籠が少しばかりあるそうである。

春日の神鹿の數と燈籠の實數は判つてゐないやうに云はれてゐるが、高田十郎氏の調査によると、石燈籠が千七百八十、金燈籠が一千十二あるそうだ。尤も此内には破損してゐるのも若干あるので人によつては數が違ふかも知れないとのことである。

★毎年節分の夜には、この夥しい燈籠に悉く點火し、春日の萬燈と云はれて大變な人氣を呼んでゐる。一夜の油が三石六斗、その油煙で神墨を作り、勅使が參向されて七晝夜の御祈禱が行はれた上、神社に備付けて希望者に授與され、萬病秡除の惠みを垂れさ

せられるとのことである。（聖火料一燈五錢）

★春日の燈籠は石でも、金でも、すべて春日社とされてゐて、春日大明神とあるのが至つて少ないそうである。俗に春日大明神とした石燈籠が三本あつて、その三本を見つけた人は長者になれると云はれてゐるが、高田氏の調査では三本以上あるそうだ。こんなことを云ひ觸らしたのは夥しい數を實際に數へる根氣のある人が居ないからであらう。

★春日燈籠の句では

夕立にぬれぬ燈籠もある　春日　蔑乃

春日道燈籠の數鹿の數　路郎

（26）霙酒

★奈良の酒は中世に於て既に名酒とされてゐたが、近世になると、より有名になつて慶長十九年十一月十五日德川家康が大阪城攻擊に向ふ途次軍を奈良に駐めた際、造酒家の正法院八左衛門が酒を獻上したところが御意に叶ひ、その後、住吉の陣へも再び酒を獻上したと傳へられてゐる。

★又神龍院梵舜の「梵舜日記」の慶長十七年閏十月四日の條に、羽柴少將池田輝政から梵舜の許へ南都諸白の新酒二樽を贈つて來たことが記されて居り、京都相國寺鹿苑院の「鹿苑日錄」の元和三年二月三日の條には、大覺寺御門跡から使があつて南都諸白兩樽を賜はつたこと、更に山科言緒の「言緒卿記」の元和五年三月十三日の條にも、關白二條昭實の許へ奈良諸白二樽を進獻したことが見えて居つて、當時、奈良の酒が名酒として珍重され贈答にも好んで用ひられてゐたことを物語つてゐる。

★ところが、それほど有名だつた酒も、今日では灘にその名を奪はれてしまひ僅にあられ酒の名が奈良の名産として知られてゐるに過ぎない。

★そのあられ酒がいつ頃どうして起つたかと云へば慶長の頃、奈良の中筋町に代々醫を業とする糸屋宗仙といふ人が春日神社に參詣の歸途、猿澤池畔を通りかかつたとき、霰が降つて來て、それが池中に沈下するのを眺め、それに暗示を得て工夫したものだと云はれてゐる。

★ところが、ある書に、元和の頃、中院町に住した酒造家讃岐屋淺田兵助が霙酒（あられ）といふ新酒の釀造に成功し、寛永十一年十一月に、これを明正天皇に奉獻してゐるし、これより先に、幕府へも獻上して引續き獻上するやうに命を蒙つたと云はれてゐるのを見ると、醫者の糸屋宗仙が案出したものを淺田兵助が改良したものではあるまいか。慶長と元和では兩者の間に、何等かの關聯がありそうである。

★一說には霙酒の歴史はウンと古く、天平勝寶二年、孝謙天皇が春日に行幸、酒殿に入らせられ御休憩の時、急霰が御前に置かせられた御盞の中に浮び非常に興を添へ奉つたゆゑ、之から霙酒の稱が始つたものだとも傳へられてゐる。

★「奈良曝」には酒屋方として酢屋町の菊屋治左衛門、椿井町の菊屋長左衛門、中院町の讃岐屋兵介以下廿五軒が擧げられて居り、幕末嘉永、安政頃の奈良奉行與力橋本政孝の筆記によると當時奈良の酒屋は廿六軒あつて、其中で菊屋治左衛門と正法院八左衛門の二人が將軍家の御用を承つて江戸城本丸へ納入してゐる。

★現に、中筋町の關急奈良前に菊屋本店と稱するあられ酒の店が殘つてゐるが、名は米浪芳之助となつてゐる。

★霙酒の句では

あられ酒只の味淋と思へども　美根子

あられ酒でもと上戸へ御用立て　蔑乃

（27）奈良漬

★慶長年間のこと、奈良の中筋町に代々醫を業としてゐた絲屋宗仙といふ人があつて醫業の傍ら酒に藥味を加へて種々の酒を釀つた。その粕へ瓜を漬けて賞翫してみたところがなか〳〵風味がいゝのであちこちへ贈り物にしたところが、大變よろこばれ、次ぎ〳〵に註文が來るので、遂に醫者を廢めて漬物の製造を業としたこれが奈良漬の濫觴。

★宗仙は德川家康が大阪冬の陣の途次、奈良に駐泊中、その旅情を慰めるため霙酒粕漬（奈良漬）を獻じ、後に陣營から多くの註文があつて、その都度餘分に齎らして、これを近臣諸侯に分與し稿軍の資としたところ、諸侯の賞味するところとなつて一時に有名になつたが、其後菊屋治左衛門に業を讓つたそうである。

★奈良漬の句

お荷物ですがと奈良漬そのとほり　アート

朝立ちの膳奈良漬の音をさせ　蔑乃

粕桶へかつぱと伏した瓜と瓜　同

奈良漬を入れて汽車辨出來上り　路郎

奈良漬に酔うて船場の御寮人　同

短冊も㊗ですと和正堂
書畫材料商
和正堂
大阪心齋橋筋二丁目
電話南二七五番

川柳塔

—路郎選—

隣組禮云ふ事が殖えて來た　堺　麻生葭乃

演畫顏蝶々は低く〳〵とび

消費者のどつち向いても痛められ　獨佛協定

捕虜還す程佛蘭西を信じてず

爐邊談話自國びいきの耳で聞く　大阪　橋本綠雨

靴磨きマスクをとれば良い男

糸屑を大切にして胸を病み

落ちぶれて古い名刺を探しあて　大阪　高橋かほる

歌舞伎座の「歌女おぼえ書」

お光狂亂女役者のやるせなさ

純情の芝居の裏で一人待ち

花道がざわめき劇中劇へ幕

あにいもうと堤の上と下で泣く　横濱　福田山雨樓

植木屋の留守を眼元の涼しい娘

その父と女中山國の色で來る

逸話多く雨の中なる一周忌

錠劑をパクリと呑んでうらさびし　兵庫縣　奥村丹路

宮仕へがたつく椅子を直してゐ

オツチヤンと呼ばれ出勤暇がいり

忙中閑缺席の墨をする

愛慾の瞳にうたがはぬ花の白

美人語らずわれはとしよりくさく食ふ　池素描

ひよつこり、のつこり、河童があがりさうな池　布哇　高澤一浪

假名だけは讀める二世の文學士

よく首が廻るものだと要らぬ世話

嗚呼淋し無言の抗議さへもなく

船出して十日餞別締切らず

御禱のなかぞよい人から電話

笑顏での否認は否認にはあらず　大阪　戸田孤筵

五分ほど乘るに女は本を開け

不器用な父に手工を手傳はせ

結婚醫學ブツクカバーをしてますが

誤字は誤字これは彼女の手紙です

解剖着ポケツに數珠をもつてゐる　兵庫縣川西町　戸倉普天

行列が流行りパン屋にも映畫にも

トランプに退屈凌ぐ伊香保行　墓參して

丸停のしきみに御先祖おかしかろ

里歸り配給米も提げて來る

賣れ殘りの菓子はやつぱりまづかりき

双生兒一人は祖母が抱いて寢る

藝妓はんとお米の話で時間が來　福知山　小畑自由朗

新體制お寺正確に鐘を撞き
防諜々々僕等はそんな阿呆ぢやない　大阪府高石町　米本貴志子

一生を夢も持たずに死んでゆき
願ぎ事の有つて地藏の花を替へ
その額で化粧なし日をなげくとは
たよられて思案の中へ首を入れ
マイクから大阪辯がすら〳〵と　兵庫縣　水谷鮎美

陶製のボタン冷めたき控室
まとまらぬ話にビルを見あげたり
樂燒へ一筆もらす自奮の辭　大阪　夷一笑

★

休閑地お宅もですかそうですか
子をだいておむつを取つて頂戴か
らくがきをのこして一家越してゆき
ピンポンのボールの様に子等遊ぶ
螢籠夜汽車の窓を少しあけ
風車子が寢て居てもまわるもの
さみだれの驛から女足袋をぬぎ　大津　鈴木石鹿

四月末日叔母急逝

臨終の慾は西瓜の一ツ切れ
二合三勺足るの足らんの通夜の席
節米にわたしチツとも痩せないの
國民服お茶屋の亭主とは見えず
金などと心ならずも云ひ切つた
よう飲まんお客ばかりの有難さ
湯の宿のこんな所に部屋があり
歸還して統制法のむつかしき

戰地の弟より

抗日の壁畫の下に敵の死屍　今治　月原宵明

盆栽へ水打ちきれぬいゝくらし
座敷牢ひつそりとして桐の花
狂人の畫寢つつじが咲いてゐる
網干して倅は何處で銃をとる
それ海だ山だ殺生やめられず
酢のもので一本つける夜の檢事　櫻鯛

さくら鯛から瀨戸のあけぼの　鄕島縣穴吹町　姫田夕鐘

その中にびつこの雀が居て哀れ
國技館代用食の聲でなし
河鹿々々ビールの肴でない時世
特許權を賣る話茶屋で呑みながら
增産々々默々と耕せり　農繁期

牛思へらく人間共のあわてやう

林芙美子阿波路入り

お遍路お芙美幽谷へ解け入りて　大阪府柏原町　宮岡白峯

休閑地今年はなすの花もさき
職域の奉公だけへ日は暮れる
鼻髭を拔いて年俸貰つとき
大平洋貴郎の智慧も借りられる
寢台へ朝顏咲いて病んでゐる　松本　石曾根民郎

スパイ絶たむ若葉の道をたのしみつ
手も足もわがちからなる日を稼ぐ
飛石へ左遷の髭は動かざり　大阪　正本水客

引越の荷物を二階から見てる

幼稚な時局談でスキ燒をよばれ
子の熱がひいて金魚の水をかへ
盛裝できて辨當に手もふれず
女の靴をみてゐておかしくなりぬ
鹿の脊にゆつくりふれる藤の房
北支蒙疆とは一口に云へど

豐中　黑川紫香

もう一人抱きこむ樣に乘る車掌
教室の蜻蛉教師が追ひに立ち
本通りさけて相談聞いてくれ

大阪　丸尾潮花

家庭とはかく波風のたつものか
暇をとる女給噂の人へ嫁し
一歩一歩世に出る度に君思ふ
美しく生る姿を失はず

大阪　岩橋双虎

奥サンと呼べば怒つた顏もせず
擧手の禮映畫かぶれの娘等別れ

淡輪にて

表情もなく支那のひと降りて來る

神戸　岡田某人

もう夏の雲だと閑な人の見し
鯛の鯛ふとところ紙を無心する
文句言ひながら朝畫晩とたべ
未亡人は男まさりの青疊

感懷

十年添ふてものわすれかな

尼崎　酒井斗風

ふるい手をつかい停年まで居る氣
モーニング知つた巡査にひやかされ
茶漬する畫へ呉服屋おとづれる
轉業へ鷄を飼ひたい妻の夢

大阪　北川春巢

療養の釣れいでもよい糸を垂れ
本象牙パイプのやにの染まりやう
鹿島立ちカラ〳〵笑ふばかりなり
子の寢息後妻の話斷る氣
蚊線香の消えたのを蚊に教へられ
陳情は大阪辯でまくし立て
夏ぶとん子はたくましき足をほり
運命にしては殺生な損をさし
戀に似たこゝろで髯を剃つて行き

堺　中原銃人

あの娘もまだだわ女學校の名簿
白い眼の石膏像にある空虛
夏の夜の夢の中なるところてん
もう夏の汗の中なる軍需工
急患へ醫者の手付きがつめたすぎ
五年前十年前に觸れたがり
生き拔いて行こうビタミン劑を買ひ

廣島　濱田久米雄

金で購へる女と歩く夜の霧
いつの世も女の嘘は美しい
お嬢さん日本は戰爭してゐます
慾の無い顏は尺八吹いてゐた
幇間の死が小説になつてゐる
老ケ役が背中を見せて殺される
純情を舞妓は金で見積られ

大阪　魚住滿潮

小市民の慰安絹糸草を植え
みつ豆を喰べて別れただけのこと
もうあかんと言つて半年過したり
兎も角も茄子が出來た休閑地　大阪　清水史路

都ホテル
酌いでやれば外人までが名刺くれ
シャンデリア俺より上の人ばかり

南禪寺
山門にみどりの風だ京の風　加茂ノ宮

眞人間紀の森の砂利を踏み
山負へる甲斐四ン階に瀧を垂れ
京の初夏いま山門の風に立ち
京に來て京に住みたい年となり

川島工場見學
綴織糸曼茶羅のことに觸れ
呼べば兵みんな顔上げ笑ふ兵

ノモンハン戰手記を讀みて
兵喰はず草喰ふ馬をぢつと見る
日記帳微熱はあれど咳も止み　西宮　西川愁水

勿體無や代用食が殘つて居
此の氣持どうにもならぬ人を待ち　大阪　中内翠芳

不足など言つてる暇に考へよ
三選しさて參戰論何う裁く
休閑地只ゴチヤ〳〵と植えてあり　下關　多田市多樓

監督ぢやないから君等すひたまへ
内職へ隣組から弟子が出來

内職へ二番目の子が熱を出し

夜の宮島へ遊ぶ（二句）　廣島　大森風來子

散歩の足と氣づく宿曳き
滿潮の夜の鳥居が圖畫に似る
ガチヤガチヤと子供の聲に路次暮るる
月賦などあつた昔をなつかしみ
女だしぬけに招待券を二枚くれ

下關の市多樓氏病むの報に接す
心して吹け關門の初夏の風　岡山　鈴木九坡

文化住宅西陽へ武裝する
金がたまつたらたまつたらどペタル踏む
掛取りに行く表情をちと變える
奢らせたビールの泡を貧ぼりぬ
吸取紙滿身創痍で捨てられる　岡山　逸見灯竿

大局へ私事を忘れた日の疲れ
美顏水一滴俺もつけて見る
酒ビール結極水を飲んで寢る
女なればこそ窓際に生活する
節米は俺だ〳〵と麥が熟れ　廣島　石原伯峯

氣の弱いひとのお世辭が皮肉めき
ひとところの文學熱は冷めたかネ　堺　麻生アート

いつの日か職の事など云ひそめし
惱みなどか明日あさつてを忘れざる
歪んだ若さが悲しいんだ友よ　大牟田　高田抱逸

協力をせよと車輪に例へられ
養魚池で巡査が一人釣つてゐる

國栖の翁の舞

西田卿樂

近頃珍しいものを見た。國栖奏又は國栖舞ともいふ。往古宮中に於て大嘗祭、毎歳元旦諸節會等に催されたが戰亂その他の事情でその事絶えてゐたところ、明治十年、鳳輦西巡し給ふや、大和今井町の行在所にて御前奏の光榮に浴し、大正五年、天皇皇后兩陛下橿原神宮御親祭の砌天覽に供し奉り、現在は毎年四月三日橿原神宮に於て奉奏する例となつてゐる。又登極令の御規定であるとも聞く。

此の演奏の起原ともいふべきものは、人皇四十代天武天皇吉野に行幸の際、大友皇子の軍に襲はれ、國栖に遁れたまひし時、漁翁等が忠誠を盡してかくまひ申し、腹赤の贄(ウグイと云ふ魚)を獻じ、舞を奏し奉仕した事から始まるもので、以來宮中に行事として行はせられた。大和吉野郡國栖村には、國栖奏奉仕の特權を與へられた家筋が今も殘つて、翁筋と唱へてゐる。此の特權の家筋では壽永の頃より參朝奉奏のことが絶えて以來、國栖に淨見原神社(天武帝を祀る)を祀つて毎歳舊正月十四日、神前に奉奏なしつゞけて今日に至つてゐる。

去る五月十四日、その淨見原神社の社務所に於て翁筋の人達から、時ならず神社に奉納するといふことにして、吾々に見せてもらつたもので、まことに近頃珍しい事の一つであつた。

その日は近畿本卿會の例會で、右の國栖を中心に植物採集をし、この邊の古跡名所を訪ひ、吉野紙の製造所を見學して最後に國栖奏を見たのであるが、序に少しばかりこの邊の史跡を書添へて置かう。

宮瀧

上市から二里ばかり吉野川を溯る所の村でこゝに往古離宮があつた。應神帝以來雄略、齊明天武、持統、文武、元正の諸帝相つゞいて行幸せられ、聖武帝の時を最後としてゐる。今離宮趾といひ傳へられてゐる所は國民學校の傍の桑畑で、礎石などが發見せられたそうであるが判然とは明らかでない。これら諸帝に奉從した萬葉の歌人たちが詠んだ歌と照合せる山、川、その邊の地形が、往古懷かしく眺められるし、さすがに離宮を營ませられた風光の好さに浸ることが出來る。私はこゝには、四五度も訪ねてゐる。數年前子供の中學三年の春もこゝに連れ來つて、夏實川、象山、夢の淵などを敎へた事である。

穴居の跡

國栖の街道を左(奥へ向つて)へ山路を斜に十丁ばかり登り鹿鹽神社(延喜式内大社)に賽しその右二三丁筋違に下つた所に、大きな岩に小さな鳥居が建ち、柵が廻らされてある所がある。神岩といふ。先住民の穴居の跡だといふ。

神武天皇御東征の砌、吉野川の上流を過ぎ給ふ時、尾ある人種岩を押分けて出づ、帝「汝は何者ぞ」と問ひ給ふ。「臣は國神磐排別の子なり」と答ふ。帝之に國栖の名を賜ふ。

なにさま古い事で、想像も及ばぬけれども、こゝらに先住民の穴居した事は、彼等が狩獵に便なる山川の畔に居を選んだのが、察せられる。國栖村は宮瀧の一里餘上手。

吉野紙

古川柳ではお馴染の吉野紙、美須紙はこの邊で作られる。機械漉の各種の紙が大量生産される今日も尙ほ、此の邊では舊態依然として、楮の纖維をとかして、手漉で實に美しい軟い、薄い紙を作つてゐる。それが近來は軍需品として重要されると聞いて、感を深うする次第である、和紙の製法は大同小異であるが、こゝでは皆漉手は若い女で手つきの鮮やかなところ、立見してしばし我れを忘れて居たほどだつた。

國栖奏

演奏者は老若皆翁といふ。舞翁二人、笛翁四人、鼓翁一人、歌翁五人、何れも桐竹鳳凰の紋を青摺にした布衫を着し、冠を頂き、沓を穿ち笏を把持す。奏樂の笛、鼓、舞の鈴等は他の神饌と共に一旦神に供へる。神饌物には毛醂(あかがへる)醴酒(一夜醸甘酒)、腹赤魚(うぐひ)山果(樫の實か栗)土毛(ねぜり)。

奏者はそれ〴〵裝束してこれらの神饌をなして各々定りの位置に着坐し、笛翁の笛、鼓翁の鼓、歌翁の歌につれて、舞翁が榊と鈴を採つて舞ふのであるが、歌は次の四つである。

一歌　よに出でばはらかのうをのかたわれもおきながふ

二歌　ちにすむつきみよしのにくゞのおきながなかりせばはらからのみに忝たれかさゝげむ

三歌　すゞのねにしらきのふゑのおとするはくずのおきなのまゐるものかはかしのふによくすをつくりよくすにかめるおほみきうまらにきこしもちをせまろかち

歌四　といふので詳しくは略すがそれ〴〵ゆはれがある。歌ひ方、聲調は「君ケ代」に似た。いかにも神前奏らしい、おちついたもので舞の手振といへば、右に榊、左に鈴を持ち、腰を伸したまゝ足を開き、又揃へ右に左に向き、足踏をし時々鈴を振るさまも極めて單調、素朴、しかしほんとうに純な姿とでもいはうか、能の翁の舞も三番叟の舞もこれから出たといはれるのであるが。そうした技巧めいた處は少しもない。ものゝ根源といふものは、すべてこんなものであらふと思つた。

舞終つた時、第四歌、「きこしもちをせまろかち」と歌ひ終ると奏者一同口に手をかざして笑ふ型をする。これは美味しくお召上り下さいというて、愛相笑ひをするのであるそうなが、人に物を進じて、つまらぬものですと笑ふ、そんなものであるといふ。

Sata Special Klinik
佐多醫院
大阪堂島北町
電北八二八四
市電堂島中町停留所北辻西入
呼吸器病科
内科
毎年日前
診療
醫學博士 佐多愛彦
醫學博士 加藤謙一
螺良四郎
電北 88
電尼崎 1151

旅の手紙

―路郎師と共に―

高鷲亞鈍

Y・Aさま　六月八日午前四時

「マンインノタメ一一ジ　七フンデタツ」

今、汽車中でボーイから、この電報を受取りました。岡山午前二時三三分發の特急「富士」に豫定通り乘り込めましたので、先生を捜してみたが見當らず、悲觀して座席に戻つたばかしのところ。窓外が眞暗で判りませんが、汽車は尾之道あたりを通過してゐるのではないかと思ひます。あゝこれで下關まで何時間も一人旅をせねばならぬかと考へると、寂しい。だつて僕は絶對に汽車で寢つかれつこないんですもの。所在なさに旅行案内を繰つて十一時七分發の列車を調べてみましたが、岡山着が午前二時四一分、下關着が午後一時三五分。僕の特急は下關着が午前九時二五分だから大體四時間早く先に着く事になります。岡山で十分程の差が、特急と普通でこれ丈違つてくるのです。然も豫定通り先生が、僕の特急に大阪から乘られたら、午後一一時三四分發だつたから、一一時七分發の普通車より三〇分程後の汽車なんです。こんな泣言を言つても、もう仕方がありません。汽車中先生と呑むつもりで、岡山のお酒「御前酒」を手に入れて置いたのですが、これは僕一人で呑んでもつまらない。一人汽車なんて辛い〳〵。僕の座席の前は人相の悪い男が假睡してゐます。せめて女學生とでも代つて呉れてゐたら、話相手になつてあげるのに。（車中より）

B・Oに　六月八日午前十時

六日、わざ〳〵お見送りありがたう。あれから、姫、新線に乘つて、子供達も車中元氣に中國勝山驛に着いたのが午後五時五一分、大阪發午後〇時かつきりだつたから、まる〳〵これ丈の時間がかゝつたわけだ。驛には岳父が迎へにきて呉れたので都合よく、家内の生家に着けば養蠶時で、とても忙しさうだつた。その晩、岳父と久しぶり晩酌を交し、翌七日、妻や子供を殘して晝頃岡山に發つた。新見廻りの伯備線で岡山まで四時間はかゝる。距離はそれ程でもないが、この汽車はべらぼうにのろいから辛氣臭い。倉敷で乘り換へて金光驛で下車し、金光教御本部にお詣りした。夕方、岡山市驛に戻り、君の命令もあつたので、中之町の鈴木九坡を訪ねたが留守で逢へなかつた。岡山のお城見物その他市内を見物し、驛の前で、カフエーやオデン屋で、酒やビールをあふつた。倉惶として驛の待合所にかへり、大阪發午後十一時半の特急に乘られる路郎先生の汽車を把まへる可く、午前二時ごろまで待つ。午前二時二八分特急がプラットに辷り込む。窓から先生が首を出して呉れる筈なので、その首を求めたが見當らず、遂に車内に入つてくまなく捜したが先生は居なかつた。僕の失望は大きい。午前九時半頃下關に着。

今、驛前の下關ホテルで休憩し、第一信を書いてゐる。下關は日本の西玄關である。改札口を出、ズツクの鞄を一個さげて、茫然として立ちすくんでゐる旅馴れない僕の姿を想像して欲しい。滅多に大阪から離れたことのない僕。旅行嫌な僕。たつた一人でとんでもないところに來たものだ。幸ひ先生に市多樓氏の住所を教へられてゐたので、電報を打つた。午後一時すぎ先生を乘せた汽車が着く筈。當地の柳友とも初對面の方ばかりだ。疲れた顏はみせたくないので、髭を削り、顏を洗ふ。亞鈍の第一印象を良くしたいからネ。身體つきがコロ〳〵してゐるのは今更どうしやうもない。せめて服やネクタイをキチンとしませう。何れ追ひ〳〵と通信を送る。（下關ホテル）

R・O父上様　六月八日午前十時

突然、家族連で押しかけ御迷惑でした。達子も純子も百日咳や肺炎に罹つた直後故、孫可愛さに何でも喰やさゝぬやうお祖母さんを注意して下さい。さういふお祖父さんも危いもんだが、滯在中餘り子供達を甘やかさぬやうに。

岡山の御本部にお詣りし、教祖様に、「旅行の途次立寄りました、初婚當時夫婦でお詣りさして戴きまして七年ぶりで御座います。久しぶりお目にかゝり、御氣嫌麗しくお目出度う存じます。」と一寸巷のお殿様にお目通りする侍みたいな言上をして了ひ、あとで微苦笑してゐます。それでも勿體

なくも、ハイハイと御返事して戴き、ニンマリ笑つて戴きました。汽車中で、おまへの先生と呑みなと、お母さんが、昨晩のお酒をビール壜に入れ、海苔と一緒に、鞄に入れて置いて呉れたが到頭、川柳の先生と落ち合へませんでした。いま下關驛前のホテルで休憩してゐます。遅れた先生の汽車を待つために。曾祖母さまお大切に、皆様によろしく。（下關ホテル）

Y・Aさま　六月九日午前二時

八日午前九時二五分下關に豫定通り着きました。驛前の下關ホテルで一先づ休憩し、早速多田市多樓氏宛「イマシモノセキホテルデ　ヤスムデンワ六二三」と打電し、お晝まへ頃私が洗面所で髭を削つてゐる間に電話があり、今浦の圓通寺に直ぐ來てくれとの事、ホテルのボーイに案内さして、驛から五丁たらず歩いて會場に參りました。市多樓氏は僕の顏をみて吃驚りされました。やあ亜鈍さんでしたか、實は電報に名前がなかつたから誰だか判らなかつたので、との挨拶、僕も、ホテルのボーイが洗面所に居た僕を知らずに取りついで呉れなかつたお詫びをしました。藤井米三さん、岩崎勇記さん等紹介され、名刺を交換しました。後で判つたことなんですが、米三さんは古く川柳をやつてゐる方ださうで、お年は一見、先生と同じ位の年輩ですが、既に六十を超えてゐられ、尙畺鑠たるものがあり、縣代表の代議士にもなられたとの事、幼少は長州出身の松岡洋右と友人で、十三才の時米國へ行くことを松岡さんと一緒に約束してゐて、事情が出來て果されなかつたのださうです。そろ〳〵先生の汽車が着く時間になつたので、驛へ、市多樓、勇記の諸君に僕も加つて迎へに出掛けました。驛では、構内で勤務中の國弘半休兄を紹介されました。御承知の通り半休さんは下關支部の責任者です。一時三五分先生の汽車がバツバツと喘ぎ乍ら構内に入つて來ました。僕達が待機してゐると、煙草を咥へ、ノーハットで片手に小型トランクと見覺えある折鞄を抱へて、こちらを向いてブラリ〳〵とやつて來られる。先生、煙草咥へて相變らずや、と市多樓君が嬉しさうに叫ぶ。やあ、と先生は、こちらの方を向いて聲をかけられた。先生持ちませう。と左右から、トランクと鞄が毫ぎとられ、そのまゝタクシーで迂回して圓通寺の下まで乘りつけました。圓通寺は高台に建つてゐて、石段を相當登らねばなりません。別室でお茶をよばれながらのお話に、大阪で特急券が滿員のため買へなかつた由、そして普通車に乘りはしたが下關まで身動きさへ出來なかつたと仰言られました。然し先生はお元氣です。それでも三時近く句會を始め先生の柳話並びに講演がありました。披講は、△スパイ—路郎師選、△健康—亜鈍選、△靴—默笑選、△途中—九呂平選、△臍繰—米三選でした。僕の軸吟は先生に捧げた句。

御健康を念じ恩師と旅に居る

句會が終ると、そのまゝお寺に殘つて有志の方と夕餐を共にしました。料理屋のお膳と違つて、御手料理、しかも美味しい御馳走で、精進料理どころではありません。御酒も出て陶然としました。當寺は禪宗で、こゝの若院主は三方と號し、川柳もやられます。眉毛の濃く太く吊り上つて、日蓮さんみたいな頑丈な坊さんで、酒豪家らしいです。市多樓氏の奥さまがお酌をして呉れました。眼鏡をかけ、絣の着物で一寸粋な恰好の草路さん、八幡から見えた默笑君、それから九呂平君など皆、好い方ばかし。

座敷から、下關の街々が見え、下關港が擴がつてゐます。宮本武藏に殺られた佐々木巖流の名をとつた巖流島も、あれだと敎へて貰ひました。天候は良し、全くのんびりした風景です。そろ〳〵先生の揮毫が始まりました。庭へ出て記念撮影をしたりして、七時過ぎ會を閉じました。明日の日程を市多樓氏と打合せし、三方、草路さんにお禮を述べて寺を下りました。折から十四夜の月が中天にかゝり、吾々今後の旅程を明るく照して呉れてゐさうです。

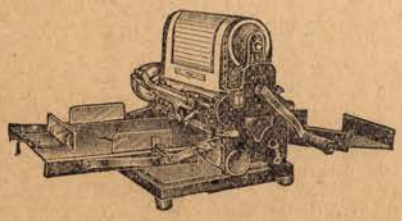
下關から連絡船で門司に、間一髮、急行に乘り遲れたゝめ、五十分程待ち合し、熊本行午後十時五五分發の最終の普通車にて、博多に着いたのが午前一時三〇分、比佐屋旅館に投宿しました。明日は市多樓、半休兩君が大牟田まで同行して呉れます。奥さん！豫定が少し變更しました。市多樓氏が交渉して、大牟田の高田抱逸氏と打ち合し、明晩大牟田で句會を持つやうになつたことです。明日はそれ故大牟田宿りです。寢つきの良い先生は、既に輕い鼾をかいてゐられます。それではお休みなさい。（博多比佐屋旅館）

A・A君に　六月九日午前二時

アート君、毎日事務所に出

堀井輪轉謄寫機

纖細　速妙



大阪市東區平野町二

伊藤喜商店

（型錄贈呈）

電話北濱（23）〇三二四番

九州支店　福岡市上西町

てゐますか。先生より一足先に大阪に發つた僕は、今日、—と言つても今午前二時だから昨日のことになりますが—下關の句會で、先生と落ち會ひ、ずつと行動を共にしました。詳細は葭乃奥さま宛の手紙をみて下さい。下關から門司に行く連絡船の二十分ばかり、僕は何故か、少年のやうな感傷に捉はれました。汽車に乘り、日本の一番端つこまで來てしまひ、今また船で、より離れてゆかうとする氣持ネ。遠い〳〵ところへ行つてしまうやうで、お笑ひ下さい。三人の子供の親である僕でも斯ういふ旅愁は始めての經驗だけに、少年の氣持にまで戻つてしまうんです。甲板のお尻で先生と一緒に腰かけ、先生の煙草に、シュッと燐寸をすつてさしあげました。ぱつと明るんだ先生のうつむく削げた頬から顎に、髭がのびてゐるのも妙に胸がつまります。下關の灯がチラチラしてゐたのも消えてしまひました。先生！　どうもセンチになつて不可ません。と言ふと、とつくに僕の感傷を汲んでゐられたのか、先生は含み笑ひをして應へられた。そのうちにゴーゴーといふ船底の音、カンカン〳〵と金屬の打つ音が聞えてくる。さあ門司だよ、亞鈍君。と先生は腰を上げられる。案外早いですネ。と僕は先生に附き添つて慌てゝ立ち上りました。（博多比佐屋旅館前便と同封）

B・Oに　六月九日午前二時

下關で、殘念乍ら櫻川不水に逢へなかつた。不水君は關釜連絡船「興安丸」の電信長に榮轉してゐて、航海中の由快男兒不水の顏を見ず、そのまゝ博多に來て、宿をとつてしまつた。明日（實は今日）午前中は先生の私用があるので、僕は自由行動をとるつもり。大阪の形水が商用で博多に來る筈になつてゐたが、連達で中止になつたと言つて來た。午後博多を發つて大牟田に向ふ。研究會の原稿整理、月評會「川柳一ト筋」は丹路君を扶けてよろしく賴むよ。宿の枕が固く、今宵も寢つかれさうもない。シュライエルマヘルの「獨り想ふ」を枕邊へ近寄せて、暫く讀むつもりだ。オールボアール。（博多比佐屋旅館）

N・Y詩兄　六月九日午前四時

六日匆々のうちに大阪を發ち失禮しました。龜田君の詩集出版記念會の發起人に加つてゐながら、出席出來ず御許容下さい。七日祝電を打つつもりでゐましたが、岡山市内見物をしてゐるうちすつかり忘れてゐました。惡しからず。八日下關、只今、博多の旅館に着いたばかし、九日大牟田、十日別府、十一日は松山、道後溫泉に浸り、十二日大洲、十三日今治、高松を經て、大阪へは十四日頃歸ることにならうかと存じます。アート君の原稿は直接、貴兄宛送るやう言つて置くつもりですから、宜敷くお願ひします。六月號の「火の少女」はやはり佳作ですネ。旅行中、詩の方の友達とは誰にも逢はないつもりです。麻生氏は至極元氣で、地方に於ける先生の歡迎は大したものです。殊に詩人と逢ひ、川柳の方では一家の主が多いだけに、その歡待ぶりも浮ついてゐません。師弟關係の微やかさも實に美しく麗しい。詩人の若僧輩の大いに勉ぶ可き點かと考へます。何れ旅中、珍しい事、變つたことがあればお知らせします。奥さまによろしくお身體御大切に。（博多比佐屋旅館）

★冬原（詩集）龜田九十九著
はなうばら外四十五篇を集錄。定價は金二圓東京市小石川區關口台町二十一詩洋社發行（振替東京三六二七五番）

戰線の將士へ
白衣の勇士へ
慰問品を
慰問袋
慰問品賣場　一階
實用向百貨店
松坂屋
大阪・日本橋

武玉川四編研究（二〇）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

（490）

娘の恥に一町か出る

東魚＝白木屋お熊を匂はしてゐるのか。何町何店住某と刑になる時、其住んで居た一町の名が出る。とでも云ふのか。

塵山＝前解に相違ないやうだが、此の外に八百屋お七が居る。

省二＝一町の名が出るとのお説面白し。正釋であらう。私は非常に輕るくとつて、近所の人が探しに出るのかと思つた。

（491）

留て着て思ハぬ方へ風かふく

東魚＝袖を留めて着たら思はぬなびきやうをする。—或はこの風、戀風をほのめかしてゐるのか。

塵山＝遊女ではなくて、素人らしく思はれる。

省二＝素人らしい。その方が趣きありと思ふ。

（492）

女自慢の暑いめをする

省二＝着物もシャンときて、取りすました女自慢のおめかしの彼女氏—それは勿論暑いめもせねばならぬ

東魚＝前説につきる。

塵山＝幅廣帶に無くもがなの單羽織、あゝ暑苦しいこと哉。

（493）

檢校にして死たかる母

省二＝盲の母親としては、檢校にまでしたいと思ふのは無限の慈悲だ。死ぬ迄には是非にとの大願望。

東魚＝不具者だけに親の憂は一層深い。檢校になる日をみて、死に度いと思ふも尤である。

塵山＝南無辨才天、此の母子に幸禮を授け給へ。

（494）

大からくりの水門か明く

省二＝水門が開いて、一時に水が落ちる光景を見ては、確に大仕掛けだワイと思はせられる。（266）—『無言で猪牙の通る水門』の解釋の折、「江東の御藏橋の所に水門が有つたのではないか」とのお説があつた。藏前米藏の入堀の入口に在つた水門ではなからうか。首尾の松は五番と六番堀の間にあつた）。

東魚＝機械力で開く水門、見事に水の落つる樣が見えるやうな句である。

塵山＝米廩の方のは大きく、御藏橋の方は小さかつたと記憶する。

（495）

美男かつらを切レぬ小刀

東魚＝『眞黑な小刀を持つ野老賣』と同工で、油をとる美男かつらを賣る者が、あやしげな小刀を持つてゐるとの穿ち味であらうか。

塵山＝美男葛（南五味子）は、油を採るものでなく、その蔓を水に浸して、粘液を油の代用としたので、下村では看板替りに、其蔓を店頭に出して置いたのである。

省二＝びなんかづらを使用する事が、一時都鄙共に大流行して、「三州某の谷びなんかづらを取つくしけると」など記載さる。「切れぬ小刀」の感じを納得されるようだ。やがて此ねばり汁を用ふる事は廢れた。

（496）

折〳〵親の子に成て見る

東魚＝自分も隨分親父やお袋を泣かしたものだ。倅の事で今心配させられるのも仕方がないがと、親のあつた頃を思つてみるのであらう。

塵山＝此の親は子の話がよく判るのである。

省二＝私の解釋は少し違ふのだが、今一應考へてみる。

（497）

かうやく買て兩肌をぬく

東魚＝兩肩などへ貼るのであらう。

塵山＝按摩膏と思はれる。

省二＝かゝる場合、兩肌をぬぐにはきまつては居るが、兩肌といふ言葉は感じを、おびき出す。

（498）

仲人の水引草もむすほふれ

省二＝緣を結ぶ、即ち仲人口の緣が纏まる事に、水引草なる言葉を關聯させたもの。古俳句『結ぼれる水引草や八重葎』などの用法の如し。

東魚＝緣談成立し、仲人も禮を貰ふ事になつた、心持ちがあるやうに思ふ。

塵山＝單に水引草を持出したのみで、結婚には何の關係もない。

（499）

藥堀拵のないおとこなり

省二＝秋に入ると藥草を採集する。藥草採りであるから、別に拵をして出掛ける要はない。通常の姿の儘である。

東魚＝特別な支度とてせぬ無雜作な姿なのであらう。朴訥な男が想像される。

塵山＝『藥堀蝮も提げて戻りけり』（太祇）と云ふ、奇拔な古俳句もある。

（500）

聲かゝりにも酒を買せる

省二＝青年期に達したのを祝ふ酒である。買はせられるのは青年か、その親か。

東魚＝友達が酒を買はせるのであらう。生意氣盛りの連中。

塵山＝少年に酒を買はせるは、大いに無理だと思ふ。

（501）

寢ころんで最う見へ兼ねる門田守

東魚＝寢轉んだ儘でも鳥のくるのがみえ、鳴子繩を引いて追ひも出來たが、かう豐に稔り茂つてきては、寢たまゝでは鳥があさつてゐるのが、見通せぬと云ふのではあるまい

か。

塵山＝稲が豐に稔ると、穗が下に垂れて低くなるもので、其の前よりも鳥が能く見ゆる。此の句は事實に違ふと思ふ。

省二＝成育しつゝある頃は、寢轉んでゐても見渡せたのである。

（502）

端に立ても奥樣ハ知れ

東魚＝端近く出てゐても、流石に上品さに奥樣と知れる。

塵山＝臺所に出て居ても、下女とは品位が違ふ。

省二＝ふだん着で端にたつてゐても。

（503）

豆を時うちわかる分別

省二＝私には、その分別がわからぬ。

東魚＝解らぬ。

塵山＝「分別」が何だか判らぬ。

（504）

千鳥を斗る野田の横雲

省二＝野田に群千鳥が居る。

東魚＝横雲は「しのゝめ」と讀ますつもりではないか。磯近い田に千鳥が、一杯下りて居る樣であらう。

塵山＝「夕されば汐風こして陸奥の野田の玉川千鳥なくなり」、此の歌を採つたのである。

（505）

將軍塚の身持めてたき

省二＝拾遺都名所圖會に、將軍塚、粟田花頂山の峰にあり、塚上四にして老松四五株あり、桓武帝の御時平安城久延なるべきとて、土にて八尺の人形を作り、鐵の鎧冑を着せ弓箭を持たせて、當山の峰に西向にして埋まれける。是れ此の京の守護神とす。されば天下に災害あらん時は、塚かならず鳴動すといふと。此句の「身持ち」とは、どういふ意味か。斯る武裝の人形の姿を詠むだ丈けのものか。その姿の儘で平安である事が目出度いのか。

東魚＝嚴として姿を崩さぬ處を、頼もしくみたのであらう。

塵山＝「身持」は穩當でないと思ふ。

（506）

跡から櫛を拾ふ關の戸

省二＝女の通關者の置き忘れた櫛。一つの噂の種となる折りもあらう。

東魚＝何となしに情味がある。

塵山＝事實に有りさうである。

（507）

皆燕籠に請るはつ霜

省二＝初霜は十月の季のもの。此蒸籠は日常の家庭用のものか。さすれは一箇の風物詩。それとも玄猪には餅を搗いたから、その蒸籠への初霜か。

東魚＝玄猪の餅をふかす蒸籠が、門々にある趣であらう。

塵山＝顏見世の時に劇場の前に積む、菓子の蒸籠である。

（508）

行水をして子を輕く抱

省二＝親子行水をして、身も心もさつぱりとし、子を輕るく抱く。其の夕の家庭の團欒。

東魚＝裸の子を抱いた、涼しい心持ち。

塵山＝如何にも夏の夕暮らしい句である。

（509）

ひとつ見付て氣に懸る星

省二＝「ひとつ」は、よく光る星を一つ見付たのか。一ツ星のことか。夕方に一ツ現はれる星、曉方に一ツ殘る星。「一ツ星見付けたら長者にならう」（俗說）など云ふ。「氣に懸る」は非常に輕い意味に解し置くべきかと思はれる。でなければ前句がないと判らぬ。

東魚＝夫婦星なんと云ふ事も云ふから、一つが氣に掛るのではないか。

塵山＝氣に懸る理由が不明である。

省二＝北の一ツ星は北極星。二ツ星もあり、三ツ星はオリオン座の中軸を成す。私には星の事は、さつぱりわからぬ。

（510）

白むく着ルと沈む夕榮

省二＝吉原では八朔に白無垢を着る行事がある。それは沈む夕日の頃からであるから、一層映ゆる事である。

東魚＝吉原は夜の世界、身支度の出來る頃は夕日か沈む、靜かな美しさ。

塵山＝「沈む夕榮」とは、夕陽が沈むといふ意か。

（511）

五月雨に腰の拔たる干大根

省二＝「干大根」は、俳諧では冬の季になつて居る。干して水分をとる。それを春に食べるから春の季にもある。此句はそれが其儘になつてゐて五月雨で腰が拔けた樣に柔くなつたのだ。

東魚＝五月雨頃まで軒下に干してあつたのか。さういふ場合がありとすれば、それが柔くもどつたと云ふのである。

塵山＝五月雨に干大根が腐り出したのであらう。

武玉川四編研究正誤表（第二〇九號）

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
一〇	一	九	見る	ル（原本）
一一	二	一三	發見物	祭
一一	四	一	頓に	て

近作柳樽

選路郎

下宿屋のこんなところに鏡掛　姫路　岩崎水虹
横綱の絆創膏へ氣が疲れ　同
コムパクト建艦競爭にも似たる　同
男友達に圍まれてゐて嫁き遲れ　同
ワイシャツの綺麗な男二十八　同
いけずして來たあの顏で茶を習ひ　同

手術を受けて

脊髓にメスを入れると云ふ心寒し　神奈川　尾崎綠柳
手術室メツキした器具目に入りぬ　同
手術台生命觀を超越し　同
意氣地無き事の無き樣それのみ思ふ　同
カンフルをカンフルをこれ程弱き心臟か　同
まぐろ〳〵背中を割られたまぐろ　同
はしかして甘えることを再た覺え　奈良縣王寺町　森田カズヱ
泣かず飛ず三年經つて轉勤し　同
背中の子母と一緒に傘を持ち　同
町角で手を擧てゆく共稼ぎ　同
ハイキング汗を入れてる紐に合ひ　同
腕白をチラともみせぬ試驗の日　同
恩給の餘生胃散に賴り切り　伊丹　酒井美知夫
酒落いうて齒痛の人の氣に觸り　同
新妻のもう靴墨がありません　同
云ひ過ぎとさとつた父の酒は寢る　同
實驗は見事に消えた消火彈　同
雨は銀座はさつきの花盛り　東京　森本秋子
榮轉はまた階級を切りはなし　同
菊活けて兵隊さんの部屋にする　同
信じてはゐるが冷たい電話口　同
暇をやる女中へ着せてやる春着　同
馬鹿になりきつて動ぬ浮木と居る　愛媛縣松前町　佐伯雞城
滿潮に膨れたる河ボートこぐ　同
教師二人プールの話風呂へ來て　同
すべからず落書に似た字ではあり　同
登つてる電工にだけ夕陽が殘り　同
キユラソーを母にも一寸酌いでみる　大阪　新谷柳風
都會人尖つた顏で擦違ひ　同
山へ來て林檎は嚙るものなりき　同
山彦の他に誰だか應へてる　同
大學生を中學生がヂツと見てゐた　大阪　橋本美奈子
年寄の話もたまにはよいもんだ　同

一浪居を訪ふ

長谷川峠

午前九時半、宿の車に乘つて混雜極まりなき市中を離れる。道の兩側はケヤベ樹の並木になつてゐる。下手な墨繪の龍のやうな節瘤だらけの幹にこれは又糸のやうに長々とたれた枝、若々しい芽をつけてふわりと風に吹かれてゐる。

織るが如き軍用トラックは蟻が餌を運ぶやうに延々と往復してゐる。ワヒアワまで廿哩途中同乘の一白人が四五本しかないシガレットを僕に喫へと差し出す。殘り少なの内より拔く氣にはなれず、僕にも有ますと、口切立ての袋から一本拔いて燐寸を借りた。ワヒアワの町の見へる一軒家の店先で車を下り一浪氏の宅を聞くと、タイナンプルの道を五哩もあるといふ。一浪氏とは十年近く柳誌を通じて親しんでゐる二三回書面の往復もしてゐる。お寫眞も拜見した。一時も早く逢ひたい衝動にかられて、車がないと言ふ五哩の道を歩かうかと考へてゐると三十近いと思はれる店の女が電話をしてくれた。

一浪氏が直ぐ迎へに來るとの事だつた。北は一面タイナンプル畑で其の向ふに豆のやうに動くのは騎兵練兵場、其の背後は中腹から上へ綠したゝる小山で白い霧か雨かがおほひ冠つてゐる。二時間餘りして高級車が登つて來た。一浪氏の聟殿淺倉孝治氏が老生を迎へに來られたの

日光のにほひをさせて子は戻り　同
敬老會互に征つた孫の事　同
あまりにも夢持ちすぎる人生よ　同
螢とぶ〳〵童心の亂舞する　岡山　本田ユリエ
虚無より希望へ發芽した朝顔　同
神經質でよかつた醫者の歸りみち　同
グリンピースと云へばきれいにひびきます　同
タイプ打ち終へて仰ぐ空の蒼さよ　同
潮騷へ物は思はじはかなすぎ　岡山　生子洋子
その筋といふものがあり飲食店　同
牛乳瓶に工夫詰所も花をさし　同
闇取引國民服で引つぱられ　同
用品庫今年も柵にバラが咲き　同
丸刈となつても髭は殘したり　松江　本庄快哉
笑はなくなつて女は嫁に行き　同
スパイクのとげがさびてる選手病み　同
大阪の旅行は米を持つてゐる　同
メガホンで叱られ大阪嫌ひなり　同
子を一人やろかと云はぬ實の姉　廣島　大山露斗
うなぎ曰く出雲屋は死ぬ所　同
のど佛はいさようならさようなら　同
となり組にもしらせずに嫁き　同

貝殼の抄

貝殼よ汝は寂しきぞ砂を嚙み　松山　山本耕一路
合ひ觸れて貝殼あわれききと鳴る　同
貝殼に泌む空の碧海の蒼　同
美しと選る貝殼乳色櫻色　同
陳情へ加勢する樣に子が泣いて　和歌山　秋月宏方
同じ趣味社長に今宵招かれる　同
十七で母親となる不孝もの　同
鼻の恰好知り拔いてゐるコンパクト　同
家柄と財産へ母は嫁がす氣　神戸　平川久枝
裁縫の指故郷捨てる事想ふ　同
掃除洗濯女の徑のそれで良し　同
弟妹の喧嘩も時に食べて見る　同
親子してキヤツチボールの家愉し　東京　山田宙望
氣まぐれな或日質屋と同じ風呂　同
兵隊が並ぶと同じ眉を持ち　同
雄辯な救世軍の貌嚴し　同
中等野球きれいな涙見て歸へる　神戸　高田清成
家政婦は婚期へ答ふ術も知り　同
母病めばふと恐しき母の齡　同
足だけが心齋橋を通り拔け　同
三味線にのらない朝をさげすまれ　兵庫縣魚崎町　谷口寒草
砂利船の舷側沈みさうにゆき　同
驛辨をたべつゝましき旅にゐる　同
おうどんを待つに藝妓も醉うてゐる　同
三合九勺我は鶴嘴ふる仕事　松江　吉岡笑々
パラソルの或る日は視線除けとなり　同
もう一寸オーライどぶを通りぬけ　同
切々な願ひキリスト聞きそうな　同
アメリカの柿泥坊は雀だけ　堺府　藤本水源
朝顔も夏の勤がすんだ色　同
セルスマン日本の正義やたら褒め　同
俗物と知らず女房嫁いで來　大阪　富岡巨人
あるときは父の眞似して遊ぶなり　同
孝行な息子にされていそがしい　同
シロホンのつもり助骨叩くなり　廣島縣竹原町　西野みづほ
抱病八年本草家ほど名を覺え　同

であつた。

淺倉氏は壯年の紳士、堂々たる體軀の持主であつて、千葉縣出身耕主の親任厚つく、一千二百英町歩を支配され監督十一、其下に請負數十を使つてゐられる。拋つて置いても出來る甘藷なら飾人形のやうな白人監督でもいゝが、鳳梨野菜になると實力がなければならぬ。「オアフは始めてですか」と支配格の人にドライブされて見學させて貰ふのも川柳のおかげと思つた。ワヒアワ町は兵隊あつて繁華を極めてゐて、ホノルルよりも綺麗だと聞く、飛行場を左にメイン道路を下る。端から端まで眼が屆かない廣地である。

白楡りの水タンクが眼につく。『あれが私のキャンプです』と聞くより胸は躍る。まだ見ぬ一涙氏に逢へる。あこがれてゐた十年、その一涙氏に今逢へるのだ。三十五年前故國へ歸へり、實兄に逢ふた時より數倍の歡喜に燃へた。タンクの傍でごそごそしてゐる一涙氏の後から『やあ！』と聲をかけると『長谷川君か』と轉手古舞して喜んで吳れた。あゝ來てよかつたと思ふ。

淺倉君の案内で應接間のチエアに倚る。書架にはあふれる程ぎつりし積まれてゐる。路郎先生の短冊が眼につく。淺倉氏と雑談に花を咲かせてゐると、綺麗になつた一涙氏、闘鷄の構へで初對面の挨拶を述べやうとしてゐると、それはさせない。「やあ」「やあ」を取り交はした。無言でゐても歡喜が湧く。やゝあつて淺倉夫人、一涙氏令嬢が心盡しの料理が並ぶ。私の嗚では

朝の陽は我が爲にあり靜臥椅子　同
額揚げる端緒を猫がつけて呉れ　布哇　長谷川岬
豚の餌を提げてる金の腕時計　同
家の夢醒めて白粉臭くなり　同
誰か覗きそうな蔦の中の窓　岡山　岡眞理子
一聲でいゝのに動物園の鶴　同
踏台へモンペの腰のふらつかず　同
父も子も歩るくと決めた奉公日　名古屋　八幡勿來
少女十八母にふざけて叱られる　同

防諜週間

それからの事はもらさぬ日本人　同
荷馬車曳く馬には春もない樣な　廣島縣竹原町　杉原愛鳩
物足らぬ時は先妻思ひ出し　同
何とでも言へとセッセと金をため　同
釣の趣味殺生嫌ふ母と揉め　布施　岩本晴美
農場で習つた通り肥をやり　同
豆粕を積み農場と云ふ匂ひ　同

病床で

親の心分つてながら手古摺らせ　大阪　村治紫津

運動會の救班にゆきて

救護班どうぞ前へとカメラマン　同
手持無沙汰風船が割つて見たうなり　同
偕行社籔蚊のやうに退けてくる　大阪　有馬千斗
老人に杏下留が下卑てゐる　同
お魚の游いだまゝを運ぶ貨車　同
恩賜の煙草へ隊長の手袋白し　和歌山縣加太町　米田春童
カメラマンきけんな處一つ取り　同
窓の女白衣へそつと頭下げ　同
氷屋は漫畫の樣な鋸で切り　大阪　松浦帆船
追はれ行く羊の如く乘り降りし　同
功績は側近に居て禿げており　同
出しやばる子が級長をやつてゐる　松江　青空みたか
みんな出た映畫館水を撒き　同
デパートの女うしろに所を組むな　同
笑ひ合ふ意氣がまだあるハンゴ飯　南支　米谷松太郎
姑娘も入れて平和を寫される　同
歩哨線ほたる十字に飛びちがひ　同
科學する子供の玩具動くなり　大阪　前川不味公
孝行のまねごと一合くめんする　同
鼻の穴工場地帶と云ふ汚れ　同
逞ましい食慾母の分も食ひ　京都　福田丁路
常會を怒らす顏の油ぎり　同
節米を犬にも云うて聞したり　同
鐵兜たよる心を麥に伏せ　布施　上田翠光
歸還して言葉少なく母と居る　同
眼帶の女冷たくすれちがひ　同
日ソ條約俺がくにさは麥の出穗　北支　宇敷桃水

戰友名譽の戰死をす

萬歳て息引く戰友を抱いて泣く　同
幼な子の秋波に兵は爆笑す　同
戰陣訓微塵も私心起さざる　大阪　藤森小雅子
青春を叩き疲れたタイピスト　同
プラトニッククラブと云ふ淋しきギター　同
出征の挨拶病父のことにふれ　大阪　佐野牛歩
箝口令ばかり出してる秘密主義　同
死骸燒くほのほとなるかこの薪　同
轉業へスフのズボンがよく似合ひ　尼崎　江口正路
早熟は臍繰の技も知つてゐる　同

日本人漁船全部ではないがスパイ嫌疑で停船された爲、食卓に生魚を見る事が出來ないのに、此所は又素つけ、燒もの、刺身と卓上挾きまでに並べられる。淺倉氏は一滴も酒はいけないので老生二人呑む・食ふ話す、微笑を洩して聞いてゐられる夫人は聽しからぬ程度に氣を配られる。歡待の手が動く足が動く、よくあれだけ動かれたものだと感心させられた。呑みながら一浪氏は私を不朽洞會員に推薦してやらうとの仰せであつたが、私は未だ勉强中なので、雜詠欄の三四番所まで乘りつける迄はと御辭退した。午后五時アントリアム數千を並べた二棟の植木ハウスを見せて貰ふ。さすが枝師の作つた植物青々と成育してゐる。淺倉夫妻のドライバーで一浪氏も同乘でホノルルへ向ふ。島の土産にと鳳梨が時知らずに彼地此地に黃金色に大きく熟してゐるのを千切て、私にも千切らせて悦ばせて呉れた。次にワイパフ製糖會社の隆盛に慘めな當時の慘狀を偲び、アイイロ耕地、精糖ミール兩耕地二十八キャンプを隅々まで見學させて頂く。町はホノルルに變らぬ明るさである。一行の乘つた車は坦々たる道路を辷るやうにして走つた。すると遙か彼方にホノルルの明るい灯が見へた。

旅館前で淺倉氏夫妻に失敬したそれから一浪氏と二人でホノルルの夜を盡きぬ快談ですごした。

北海、伯樂、風竹、蹴花麗の諸氏に紹介して頂いたのは其の翌日であつた。

薫風を載るなぎなたのよく揃ふ　大阪　山本葉光
物言ひの相撲きいて〻遲い飯　同
あんな奴と思ひながらも世話になり　大阪　和久洞人
氣が付いて見れば四十に近い齡　同
蕃界で頭の下る國語聞く　臺中　高山武士
讓り合ふ裡に女の自尊心　同
奪はれん爲に着飾る女なり　大阪　南要兒
繕ひが器用に出來る情なさ　同
病む妻に茶漬ですまず膳に坐し　大阪　古岡駒志希
共稼ぎならばと貰らふことゝなり　同
サヨナラを口に出さずに歸つて來　大阪　堀秋星
女工又やつぱり長くつとまらず　同
トラックに便乘もする名士なり　神戸　湯淺小城子
農民はふとん持參の旅行をし　同
手をついて蛙遙拜するすがた　大阪　保田呆人
鳩ぽつぽ歌の通に米やれず　同
義母になれ義母の小言になれて寢る　大阪　桝岡詩朗

和歌山へ歸る

潮風に碑文うすれた芭蕉の句　同
よい趣味とほめた男も少し出來　石見　田中弘樓
新家庭藥の多ひのを笑ひ　同
小康を得て釣好きとなりにけり　名古屋　松井靜子
軍事便月の明りで書きました　同
買溜もせよと木炭倉庫に滿ち　堺　野島神樂
澤庵を出して新妻爪磨く　同
眼の玉の動搖刑事見逃さず　大阪　津路弘多呂
光りなき部屋で裸體畫眠つて居　同

次男初節句

行末は御楯となれよ花菖蒲　愛媛縣角野町　在間小樓
爭ひは子のデキモノを中にして　同
通勤ペペタル踏む娘の脚線美　岐阜　藤井紫朗
轉職をした年からの子の貯金　同
卑屈さは皮肉ぐらひに何のその　德島縣鴨島町　矢田壽澄
蚊柱をくぐり洗濯ものを寄せ　同
强がりのやうにも見える小役人　京都　小坂ふじ彌
歸還兵まとめてみたい本もあり　同
獨り者今日はユーモア記事をみる　大牟田　園田初舟
二合三勺妻の苦心の臺所　同
釘拾ろて子は國債を買ふと云ふ　大阪　高橋潮美
秘書のしたあくび社長は見逃さず　同
小娘に踊れと留守宅騷いで居　堺　村上角堂
子は叫ぶバケツの蟹が脊のびすと　大阪　松永青雲
海岸へ出る迄二人喋らない　大阪　濱本みのる
高利貸一日冷たく居るでなし　臺中　奈都里天步
軍馬への慰問茶がらが乾してあり　松江　石原松江子
櫻餅疊の上の夜が樂し　島根縣吉田町　伊藤秀坊
失なつた戀コンパクト丈のこり　神戸　福原麗美
春雨は過去の面影つれて來る　布施　山田加代
砂風呂は迎へだんごの樣になり　堺　駒井昌坊
米食時間大キナ荷物のまま入り　大阪　中西彌生
さまざまな聲で動物園が暮れ　大阪　後藤和坊

誰が讀んでも面白い！
明朗健全な漫畫雜誌！！

定價二十錢
送料一錢
（全國有名書店及ビ各驛賣店ニアリ）

輯編同共人房井平・實田秋

月刊
大阪パック

大阪パック社發行
大阪市東區橫堀二（振替大阪二六四番）

評月 川柳一ト筋

葭乃・丹路・鮎美
某人・春巣・青兒・アート

同舟近詠

そんな所に咲くから蝶に忘れられ　三原狂路

葭乃＝この句は、あんまり人に見つけられない場所に咲いてゐる花を、單なる寫生の敍法をとらずに、花の所を得ない咲きかた、つまり花自身の運命を、冷靜に見て、人間的な觀察を下してゐる點が、ちよつと異つてゐると思つて採りました。

鮎美＝句から受ける感じは作者の主觀と見た。この句の「蝶に忘れられ」は、或は人間かも知れぬ。人間となると欺瞞とも思はれる。が、併し飜つて蝶は蝶と見た方がいゝ。これが本當でせう。そうなると、やゝ説明に墮しますが、われ〳〵の知らない間にも「蟲媒花、風媒花」されて居るものですから、結局かうした表現は、新しい見かたであつて、つゞめてしまふと、雷、見たゞけの句になつてしまはないだらうか。

某人＝それ、つまり見たゞけの句といふ氣がしたといふのですね。結局、この句については、表現上別に問題とするやうなところはなく、どちらかと言ふと、おとなし過ぎる位と思ふんです。しかし、そんなおとなしい表現の中から酌み取られるものは、作者の花に對する思ひやり、ひいては作者の心の美しさ、さう言ふものぢやないかと思ふ。そして此の句を取り圍んではその作者の心の美しさといふものを酌めば、もうそれで充分ぢやないですか。さつき鮎美さんが言はれた「たゞ見ただけのもの」に終りはしないかといふ懼れは、あまりに表現が、スラツとし過ぎてゐるための疑問じやないかと思ひます。

アート＝僕はかう考へてゐるんです。結局同じことに成るかもわかりませんが、作者自身がおとなしい人であつて常に主義主張も持たず、世間的に損な方へばかり廻されてゐるといふ、潜在的不滿を、忘れられるやうな所に咲いてゐる花によつて自覺し、更に花に對する同情と融合して成つた一種の混沌狀態から生れた象徴の句……。

葭乃＝象徴といふところ迄は行つてゐませんね。

某人＝僕も、象徴だとは思ひません。象徴だとすれば極く初歩のものだし、第一此の句自體が詰らなくなつてしまふ。つまり先程いつたやうに、さう深く考へないで、作者の心を酌むだけにとゞめて置いた方が本當だと思ふ。

讀む方の側からすれば、今アート君の言はれたやうに、一脈象徴的な感じを受けるけれど、それは偶々表はれてゐる素材がさうさせたんであつて恐らく作者は象徴と言ふことは考へて居ないだろうと思ひます。

近作柳樽

腹の立つ日の座ぶとんが眞四角　馬場理公

葭乃＝私も一度、かう言ふ句を詠んで見たいと思ひます。

こんな感じを持つ人は幸福なやうで、却つて不幸ですね。これだけ集まられた皆さんの中で、腹が立つて仕様がない時に、座ぶとんが眞四角に見えると言ふ樣な人ゐられますか……。

某人＝そら有ります。

葭乃＝私はどうしても、そんな氣持にはなれませんが。

某人＝併し、此の句はわかるんでせう。

葭乃＝わかりますけど、そんな氣にはなりません。でも一度、そんな氣になつて見たいものです。

アート＝この感じは、怒ると言ふ氣持を遊んでるンぢやないですか。普通の遊びといふわけでは無いでせうか。

某人＝遊んで居ると言ふよりも、後から振り返つて見て居るンで、遊んでゐるといふ氣持とは少し違ふやうに思ふ。眞四角と、ぴしやつと言ひ切つたところ、言葉の感じの強さ、さういふものが如何にも腹の立つ人の氣持を表すのに相應しく、ちよつと手の附けやうのない句。これ位はつきりした感じを出して居る句は近頃少ないやうな氣がするンです。

春巣＝この座ぶとん、人が坐つて居るンですか。

葭乃＝ゐませんね。

春巣＝ゐませんか。（笑）

鮎美＝まあ〳〵しかし、座ぶとんは眞四角ですけれど、丸いとしても、自分の氣持からは、四角いとでも見えるンですね。ひよつとしたら、此の人は座ぶとんをぶつけたのかもわかりませんね。

丹路＝僕はこれ、後で振り返つて見た句と言ふよりも、さうぢや無いと思ふんです。

矢ツ張り腹の立つ日に生れたのぢやあ無いと面白くない。今、鮎美さんが言はれた丸い座ぶとんで有つても具合が悪い。矢ツ張り、四角い座ぶとんが依然として眞四角で存在してゐるのが、眼に飛び込んできて、改めて「座ぶとんが眞四角」と、直覺に言ひ切つた所に效果が有ると思ふ。

某人＝そらさうです。

鮎美＝つまり直覺的ですね。

某人＝さうです。それでね僕が先程「振り返つて云々」と言つたのは、丹路さんの終りの方に該當するやうに、さう言つたんです。此の句自體の中には反省はありません。

鮎美＝眞四角はね、鋭どい表現であつて、先程私が言つたのと、やゝ的が外れて居るかも知れませんが、丸い座蒲團であつたとしても、いゝんぢや無いでせうか。併し其處迄考へる必要はないかも知れないが、それは一つの作意であつて、事實丸い座蒲團を眞四角と持つて來て、此の句が光つて居るンぢやないですか。

某人＝それは少し考へ過ぎた様にも思ひますね。そして、さうなつて來ると先程アート君が言つた「遊ぶ、つまり感情に遊んでゐる」さういふとこも出てくるンですけれど、四角い座蒲團を「より眞四角に感じた」と、かう解釋するのが本當ぢやないかと思ひます。

鮎美＝四角い座蒲團が、より眞四角に感じられたと、某人さんの言はれたのはわかつて居ますが。さう深く考へる必要は有りませんね。

近作柳樽

お茶屋でも理性が強いお醫者さま　岩崎水虹

春巣＝これは作者が醫者でありまして、自分のことを客觀的に詠んで居るのだと私は思ひますが「お茶屋でも」のもが非常に動いてゐて、作者の理性と同時に頭の良さもわかり、且つ、お茶屋での遊び方まで、句の上に能く表はされてゐるやうに思ふんですが。

鮎美＝青兒さん、どう思ひます？。

青兒＝さうですなア……。

丹路＝これね。「理性が強いお醫者さま」が強調され過ぎて居て、それだけに留つてゐる點に置いてですな、句にあやが無いやうに思ひます。つまり、お醫者さんの職掌柄理性が強いといふだけに終つて居るやうな氣がするんですが……。

葭乃＝それは理性が強いといふ概念的な言葉を、もつとお醫者さんの所作や會話と言ふやうなもので表はせば、もつと違つたものになると思ひますけど。

丹路＝ところが先程言つたことに矛盾するやうですが、葭乃さんの言はれたやうに僕も直したらいゝと思つたが、どうも直しやうが無い。と言ふよりも、これを作者が言ひたかつたやうに思ふんですが。

青兒＝つまりこれは、お醫者さんは理性が強い、といふことを「お茶屋でも」と、持つてきて詠んだんではないかと思ひます。ですからお醫者さんはお茶屋以外でも、もつと理性が強いといふ事が想像されます。この句はお醫者の詠んだ句でなくても、第三者が横から見て詠んだ句であつても可いと思ひます。

春巣＝それはさうです。でも作者が醫者ですから。

青兒＝あ！さうですか。これはお醫者さんですか。（笑）

アート＝結局、この「お茶屋でも」のお茶屋は、いま青兒さんが言はれましたやうに、お醫者さんの理性を表現するために置いた度合の最も強い語なんでせうね。

某人＝さうですね。

丹路＝結局、理性が強いからきてゐるので、お醫者さんの理性を說明したゞけで、かういふ言葉が出て來るンですね。

青兒＝お茶屋でも理性が強いといふんですから、……強調してゐるわけですね。作者の氣持では。

川柳塔

春去りし海の廣さの風に立つ　多田市多樓

青兒＝私はこの句を讀んで何んとなく廣い心持の、海から受ける爽かな氣持にうたれました。それは非常に技功がうまいやうに感じます。何からくる印象は俳句の様な氣持も致しますが、初夏と言はずして「春去りし」と來たところ實にうまいと思ひます。そして大體の句から言へば、霞んだ春の海が、おい〳〵廣まつて行つて風に親しむ夏の海を描いたところ、短い文字でうまく現はした句だと思ひます。

某人＝非常におほらかですね。此の「春去りし」で春は過ぎてしまつた。が、あとにまだ夏のどぎつさまで來てゐない海のすつきりした感じ、それが素直に美しく表現されて居て作者と一緒に海に向つて胸を張つて立つて居る、といふ氣がします。

鮎美＝懐かしい海、ふるさとの海、そして風にものを言

ふ海、さうしたことを考へて行くと一層こゝろの海に擴つて行くことを覺えます。

葭乃＝一體海の廣々とした感じはいつの頃でせう。

某人＝それは春ですね。夏はどうしても重い感じがする。

青兒＝春は空が美しいから——冬はどす黑いです。雲が反射するからです。さて、此の句はきれいですが俳句の匂ひがしますね。

鮎美＝併し、これは立派な川柳です。

某人＝主情的ですからね。市多樓氏の句として僕は採りあげましたが、此の人にはかういふ句が少ないですね。

川柳塔

竹林に徑あり友の肩細し

石曾根民郎

某人＝どうです、此の句で鮎美さん口を切つて下さい。

鮎美＝友と肩を並べて語り來しこの徑、語りは盡きねど詮方なく別れるとこに來た。さて友は自分を離れ、前方の竹の小徑をゆく、つく〴〵と現在の友を見る眼のたゞ有難く、感謝の瞳が自然に友を細くしてゆく此の小徑。そうした極く友情の溢れた句であつて日本的な片田舍の朗景を如實に示してゐる句です。此の句からうける感じは纖細な自分を或は見詰めて居る。其處に自分を離れた友の懷かしみの重厚性が滲み出て居る。詩魂に生きる句。センチであるとは考へられない。民郎さんの今月號の他の句とも、何らか關聯が有るやうな氣もして來た。優れていゝ句だと思ふ。

某人＝春巢さんどうです。

春巢＝いやあ！。（微笑）

葭乃＝この民郎さんの竹林の句は、いま鮎美さんの言はれた言葉で充分に足りて居ると思ひます。私はこの人の、大體の句を總括して申上げたいのです。この人は四方山に圍まれた靜かなところに居られるせいか、大體にかういふ傾向の句が多いです。人事に句材を採られても、どう言ふ複雜な人間鬪爭の姿を詠まれても、句から受ける感じは何處かに清淨な風が流れてゐるやうに思ひます。さうした感じをいつも此の人の句から受けるのです。

某人＝斯ういふ句は非常に批評がし難くゝて、どうしたら自分の思つてゐることを表はせられるかわからないんだけれど、餘りに淡彩過ぎる。そんな氣がするンです。作者の持味といふものは葭乃さんのお仰言つたやうによくわかつては居るのですが、その淡彩な作者の句の中でも特に淡彩過ぎて物足りない。構圖はいゝし、描かうとするものはチヤンと描かれて居るンだが、何處かにぽつちり一ト筆入れるべかりし色彩を入れ忘れたやうな感じをうける。

青兒＝私も只今某人さんの言はれたやうに、句としては淡彩であると思ひます。友情と言つたものが能く現はされてゐると思ひます。作者の全體の作品から眺めると非常に情操の練れた句が多いと思ひます。

某人＝僕はね、此の句からは友情云々といふ事は、どうも感じにくいんです。或はさう言ふことも有らうかといふ氣はするんですけど、皆さんの仰言る程、はつきり此の句からは受けとれないんです。丹路さんどうです……。

丹路＝それは「竹林に徑あり」といふ折角氣合の籠つた上の句に對して「友の肩細し」と纖細に出てしまつたものだから、上の句の氣合が消えてしまつて、寧ろ墨繪でも見るやうな、繪畫的な氣持になつて了ふからではないのでせうか。それから僕が此の句をマークしたのは「友の肩細し」よりも「竹林に徑あり」と言ふ上の句の氣合に惚れたんで折角この氣合の籠つた上の句に對し「肩細し」と出たのは民郎さんが無意識に川柳、所謂川柳的な妥協をして了つたものではないでせうか。

某人＝そう。

葭乃＝唯單にさうとはとれませんね。

某人＝先程構圖云々といつたのは丹路さんと同じ氣持で上半で實にいゝ氣分を造つてゐながら「友の肩細し」と、妥協したと言ふよりも肝腎の所を逃げた。

丹路＝うん、上ッ滑りした。

某人＝又は、逃げたと言ふより上半の構圖だけで、ほつとして下半迄手を入れるのを忘れてしまつた。そんな風にも考へられる。それで僕の一點色彩が欲しいと言つたのは繪の中に中心となるもの、それを浮び上らせるために必要であつて、其ためには下半では物足りない。

アート＝此の句、僕は寧ろ下半の方がテーマになつてゐるのではないかと考へます。それで「竹林に徑あり」は此の句の單なる背景の樣に思ひますが。

青兒＝私も只今アート君の申された下半の「友の肩細し」といふ事を重く見て居た。それで從つて「竹林に徑あり友の肩細し」と結びつけたと取つて見た、それで友情の現はれた句だと申したわけです。

アート＝別に友情でなくても友の何か運命的なものを詠んでゐることは確だと思ふ。

某人＝若しも下半に中心が在るとすれば、此の句は案外ありふれた句だと言はれても仕方がない。それは何故かと

花花生供造装

環花花花花飾

紅

くれない

フロリスト

大阪市西區京町堀通り三丁目

電話土佐堀五一三〇番

言ふと「友の肩細し」はかういふ表現が隨分使はれて、もつと作者の良心として從來使はれた齣語以外のものを探して效果づける工夫をすべきではないか。僕の逃げたと言つた事も、結局はよく使はれた言葉を使つたから、さう受けたんで民郎さんともあろうものが「友の肩細し」と言ひたいために「竹林に徑あり」と態々拵へる事はなからうと思ふ。飽迄も作者は竹林に徑があつて、初めて此の句を創らうと思つたに違ひない。

人事的な解釋をすれば、或は友情言々といふ事になるかも知れないが、同じ作者の他の句、情操的なさま〳〵の句を見た眼からすれば、單に友情言々のみで使ふのではないと思ふ。

アート＝僕も此の竹林は實在だと思ふし、又友情といふものも考へられないのですがこの句としては何か友人自體に存在があるのではないでせうか。

某人＝勿論ないとは言ひ切れないわけです。でも其の方に重點が在るとは考へられない。この句の上からはね。

葭乃＝私ね、この句の作者が實際に、かういふ場合に行き當り、卽興的に詠んた句であつて某人さんが先程言はれたやうですと下半が此の句を完成するために拵へたやうにも受け取れますが竹林の中の小徑を周圍の人から避けて語りながらでも歩いてゐるやうに思へますので單なるお附合ひの散歩ではないと思はれますから、或る程度の友情は此の句から充分うけ取れると思ひます。それで歩いてゐても友達の姿が無意識に眼に止つたのだと、かう解釋してゐます。

某人＝結局、僕は「肩細し」が思はせ振りだと思ふ。

丹路＝僕はね。どちらに重點があるかゞ問題になつたんですが、句の素材の構成の解剖をすれば其處に、或は友情も有つたであらうし、竹林の徑も實在して居り、其點で言へば重點は人事に關する限りは下半に在るに違ひないが一端これを詩的燃燒してしまつて、一つの作品にしてしまつた時は、それが逆になつて「竹林に徑あり」の方に詩的重心が移つてゐると鑑賞しても一向差支へないと思ふし、民郎氏の作句態度から言へばさうなるのが民郎氏の意にも添ふのではないかと考へます。

（凡生筆記）

掌篇　川柳

一人息子と一人娘

小畑自由朗

一人息子と一人娘が意氣投合して「一緒にしてもらえるのやつたら」と、相方の親達を脅迫した、而し、甘いと見縊つて居た雙方の親達は意外にも、

「嫁に來い」

「養子に來い」と頑張つた。

「共れではうちの胤が絶えまつさかいに」

「うちも御同樣」

と、餉迄も頑張つた。

「そんなら」

「仕樣がおまへんさかいに」

と、とう〳〵親達はあつさりとあきらめて仕舞つた。

而し、二人は頑としてあきらめ樣とはしなかつた。

「そんならそれでよろしゆうおます」

「わたえ等にはわたえ等の覺悟がおますさかいに」

「かゝ覺悟て何んや」

「二人で佛印か蘭印へ行つて仕舞うかも知れまへんさかいに」

「こらゐかん」相方の親達はあわてた。其の結果とう〳〵一人娘の親の方が我を折つた。

「それ見い」と凱歌をあげた一人息子の方に引き替へて、一人娘の方は慘めだつた。

「こんな阿呆氣た事てあるもんやない」

「まるで人さらえに遭うた樣なもんや」と、愚痴り續けた。

「でも死んだことを思やあ」

「そらさうだす」

と二人は僅になぐさめながら、繁々と先樣へおしかけて行つて赤の他人さんから呼び捨にされても「はい」と素直な、いぢらしい娘の姿に、無念の胸をさすりながらにも、其の無事な姿に心をなぐさめた。それにしても月日が立つにつれて、吾娘が、他人の親達の肩をもんで居る不自然な姿が目に障つたり、如何に女中難の折柄とは云へ、御飯ごしらへは兎も角、洗濯物はおろか拭掃除迄、さうして今日は下駄迄洗はされて居るふびんな有樣を目のあたりにするに及んで、もう〳〵娘の親達は我慢が出來なかつた。父親は娘の耳へ吹き込んだ。

「お前には、跡を立てるべき家がちやんと立派にあんねさかいに」

「何んにもこんなつらい辛棒せんならんことあらへん」と、母親も勢ひ付いて、「なんで又、あんた、こないなことを、さゝされにやならんのや」と意氣卷き乍ら鼻を詰まらせた。

「ほんまに、どだいもう人の娘やと思ふて無茶苦茶や」と父親は苦り切つた。

「始めの頃は大事にしてくれはりましたんやけど」と、娘は泪ぐんだ。

「ふむ」父親が血色ばんだ。

「此頃ではもう、あたえに聞こえよがしに」

「なゝ何んと、云ひよるのや」

と母親も血色ばんだ。

「一人娘ちゆう者ンは、しやあないもんや、とか何んとか」

「まあ」

「それにうちの人も此頃」

「邪慳にしなさるのか」

「ちよい〳〵お酒に醉うて歸つて來たりなんかしやはりますし」

「あんたッ！」と母親はきつとなつて父親の方を振り向いた。

「よう一し」父親は決然としてうなづいた。

「さうですとも」母親も意氣ほひ込んだ。

「でも」娘が兩親のただならぬ有樣に驚ろいた。

「いゝや、お前はちつとも心配することあらへん」

「でも」娘があわてた「そんなことをしておくんなはつたら」

「阿呆やなお前は」と、母親が叱る樣に云つた。

「いゝえ」と娘は首を振り立てて、「若し、あてえが此の家から出て行く樣なことがおましたら、うちの人が死んでしまひはりまつさかいに」

「そら勝手や」

「さうだすとも」

「こないなゑげつない目に會はされとつてそこまで心配してやらんならんことあらへん」

「ほんまに、さうだんがな」

「萬事はわしにまかしとき」

「せやかてあてえ、其時はあてえも一緒に死にまつさかいに」

「えゝッ！」

「約束してまんねやもん」

「まあ！」母親はぼんやりと口を開け切つて、父親の顏を見た。

「あゝあほうな奴ぢや」と父親もぼかんとして母親の顏を見つめた。

柳川 世界史（V）

戸田孤篷

（四）ローマ史

ローマの起源

軍神マースと火の神ウエスタの巫女との神人通合によつて產れた雙兒が罪に汚れたものとしてタイバー河（ローマ市を流る）の畔に棄てられ、狼に育てられ、その一人ロムユラスの作つた都が名に因んでローマとなる。人口政策から大がかりな婦人掠奪を行つたり、奪はれた方と奪つた方が戰爭をしたり。

狼の乳にマースの胤は育ち

つかまへて來た花嫁は跛です

劍と劍留母留娘留女房

七丘の眞中に先づ一里塚

アレキサンドリヤ市

インダス河まで遠征したアレキサンドル大王は地中海に面するエジプトの一市にギリシヤ文化を植えつける。大王もその師アリストテレスも一腎の力を借したのは勿論。後世此地を治めた。プトレマイオス一世は永久的な科學研究基金を出し博物館まで作る。ユークリツトの幾何學も生體解剖を行つたと云ふ醫學者へロフイルスの研究室もこゝにあつた。だが科學はテストされた程度で實用に供される以前に無智な僧侶の宗教的壓迫に窒息さゝれそうになる。

科學座の演出王が引き受ける

エヂプトの砂に科學が埋れかけ

發明は發明象牙の塔は塔

心臟を切るまで生きて居りました

ポエニ戰役

かつてのフエニキヤの植民地カルタゴは海上權を掌握した古代世界に於ける最大商業國家。その向ふ岸にニューツと額をもたげたローマ。當然摩擦が生じてポエニ戰役となる。第壹回はシシリー島の爭奪。後手であるが海軍力を充實したローマに先ず軍配が上る。かくして不出世の英雄ハンニバルが登場、第貳回の戰役はカルタゴ軍がイスパニヤより迂回してアルプスを越えイタリー半島に侵入、ローマ市に匕首を突き立てるばかりの所で後援續かず涙を呑んで歸國。第參回に於てローマ軍の渡海作戰成功し、歷史的都市カルタゴは地上より消える。

軍擴建艦貳千年前のこと

ハンニバル勝手に捷つて來るときめ

象共がタンクの役を引きうける

ポエニ以後政治ゴロなど居るローマ

シーザー

雄圖を抱くシーザーにも遊治郎の首領をつとめた時代があつた。海賊にとらへられては逆に海賊を捕虜にして歸つたり、敵の弱點を衝く——貴公子の敵がどんなに顏を大切にするかの心理を利用して大勝を博した事もあつた。劍奴（闘技場で眞劍で渡り合つて見せる）の亂を平げ、海上でカルタゴの殘黨退治に大功のあつたポンペウスはその頃イタリー半島から大陸を斜めにつん拔けてガリヤを征し遠くブリタニヤ（今のイギリス）までローマ軍の蹄の下に修めたシーザーの名聲を妬んで排斥せんとして却て自滅し、殘敵を追つてエヂプトに渡つたシーザはクレオパトラに一目惚れする。人間如何なる英雄も宇頂點になると危い。帝位への誘惑は遂に運命的な最後を遂げる。

シーザーのある日お白粉などもつけ

貴公子の敵へは槍を顏へ投げ

ルビコン河馬を渡すに深からず

あツ！シーザーがのめります

惜しみなく殺して惜しむのも同志

——は院入御
——ず應にめ需

醫學博士　谷内興一郎

谷内小兒科病院

大阪市港區市岡元町一丁目（電車道）
電話　西四四八一
〇三七番

クレオパトラ

エヂプトの女王クレオパトラ、ファラオの後裔として自負とギリシヤ文化の教養が求めるものはより強い、より新らしい、より高い生命力であつた。ポンペウスを亡したシーザーは豫期に反した文化人であつた。艶婦の樣に思はれてゐたクレオパトラに少女の生々しさが失はれてゐなかつた。二つの偉大なる心と心が觸れ合ふ。戀と帝位の誘惑に引懸つて巨星が地に落ちるが其後に現はれたアントニウスにとつてもクレオパトラは傾城的存在であつた。然し彼女の側から云はすれば二人とも結局は只の男でしかなかつた。ローマの武力を利用してエヂプトに歸死回生の術をほどこさんとした打算的な慾望が僅に殘つてゐたが、それすらアントニウスの最後の日が同時に彼女にも最後の日となつてしまふ。

赤い帆へクレオパトラの幼き眼
シーザーは黑曜石の眼をおそれ
むかしむかしシーザーといふ男あり
美酒に醉ふたはアントニウスだけ
毒蛇を戸迷ひさした胸の艶

キリスト

クレオパトラの永遠に求めしもの、新らしき世紀の光は東方の純潔健康なる牧童として出現した。ベツレヘムの馬小舍の上に見馴れない星がその運行を止めて輝いてゐた。偶話的な處女受胎はマリヤより義父ヨセフにより大なる神性を見出す事が出來。豫言者の言葉を信ずる王の命令はイエスなる靈界の主を生れ落ちたまゝなきものにせんと誤つて數十人の罪なき嬰兒の血を流さしめた。かくして生れながら罪の十字架を背負つてゐた。

拜まれることにマリヤは少しなれ
主を賣つた銀三十枚で何買はん
其他大ぜい十字架作りはじめたり
さあ奇蹟見せろ逃げろと祭司長
キリストのモデルにしたい程度せる
罪を知る女イエスをすり拔ける

ローマ帝國

アントニウスの死後ローマは帝政となる。君主政治、民主政治、寡頭政治、一頭政治、帝政、そして暴君ネロの出現などプラトンの政體輪廻を如實に見せてくれる。漢との交渉もはじまる。

詩を一つ作るにローマ燒かせて見
コロセウム屍臭を消すに薔薇をまき
軍道の草を拔くのに忙しい
カスピ海漢のスパイも顏を出し

床屋の話

大山露斗

どこの床屋でもお喋言の好きな客があるもので、私のゆく床屋にも正さんといふ暇人がいつもお喋言りに來て客達に話題を提供してゐる。これもその正さんの話。床屋の前の露路に紙屑の寄せ屋がある。こゝの主人夫婦は從兄妹同志で、二男二女の子持ちであつたが長男はつい先日死んださうだ、長女といふのが毎日お針を習ひに行つて居るが頭が惡るく今日のことは明くる日には忘れてゐると言ふ。死んだ長男も同樣頭が惡い上に、赤いナマコの樣な顏をして小學校も行かない、その下の次男も之れ亦學友にいじめられるから嫌だ、と行かない。揃ひも揃つた子供達に、近所では血族結婚の害だらうと評判してゐるが、親も親で「向西館へ早やう行つたほうが本人も幸福だすし、私等もなんぼ安心かわかりまへん」と會ふ人毎に言つてゐるさうだ。

向西館と言ふのは火葬場のことである。この向西館について面白い話がある。廣島驛で下車した一人の紳士が「廣島一のホテルは何處だ……」と、いかにも金持らしい傲慢な態度で其所に居合せた土地の男に尋ねた所、その男この非常時にとみッとして「向西館に行きなさい……」に、件の紳士ハイヤーを呼んで向西館さして飛ばしたが、暫くすると顏を眞赤にして引返へして來て丁度上りの汽車へそゝくさと乘り込んでしまつた、といふ。

酷暑の戰線へ
慰問袋を
きつと喜ばる
大鐵百貨店

岡山から

鈴木九坡

A

ある緑日の夜店で――。私は「運勢判断」の看板の前でふと立どまつた。アセチリン瓦斯の光がズラリとならんだその一番向ふの隅で、いつもなら型の如く鹿爪らしくしやべつてゐる筈のオツサンが今宵は何故かひどくボンヤリした顔で往來を眺めてゐた。私にはすぐ思ひ當ることがあつたので、この顔見知りのオツサンに、やつぱり駄目かと聞いて見たのである。實はこの二三日來、迷信排撃の言葉が新聞に載り始めて以來、サツパリお客が來ないのださうだ。そしてどうせ酔つたまぎれの女給連れのお客達に當らず障らずの運勢を宣告して生活してゐるこの罪のないオツサンにひどい打撃を與へたのである。然も迷信排撃の趣旨は誰が考へてもそれは正しいことであるから、もうワシ等はこれからは駄目むやらうと、自分の運命だけはいともハツキリ判つてゐるらしい口調で語るのである、私はその皮肉な運命に少々同情して、どうせオツサンの運勢判断は當らんのだから心配ない、と言ふと、この氣の良い男は、ほんまに當らんからのう、とそれでも少しばかり嬉しさうに髭をふるはせて笑つたのである。

雲の列傳

ともだちの現はれては消ゆ雲のごと（丹路）

岡田某人

あゝまことに雲霧のかなた、あえかにうすれ果てたもろもろの如何にかなしくなつかしいことか。――と、思はず詠嘆の口調になるのは敢て僕ばかりではあるまい。もう十年、もつとになるかも知れない前の、その頃の仲間のおもかげの一つびとつを取り上げて、どれもこれも、それぞれの趣きと色合ひを僕の中にのこして行つた人びとのことを書きならべてみるのも、決して不愉快なことではないと思へる。たゞしかし、僕の慾をもつてすれば、なにがしの巻、だれそれの巻と、一人ひとりについておのおの一篇のものがたりにしたいのだが、そして又それにふさはしい材料もあるのだが、それでは實に尨大なものになるであらうし、充分なとりまとめにはいまだいたつてゐないので、いまは單に抜き書、おぼえ書の程度に止めるのも止むを得ない次第、これを讀まれる方々は、これだけの荒筋から、かなしくもおかしい一連の仲間の生活のあらましと、その成りゆきの雲の如く、風の如きを、あたまのなかにそれ〴〵に描き出してみて頂くよりほかないのである。ひいては又、これらの仲間にとりまかれ、入りまじつて過してゐた僕の十數年前をも作り上げて下さるであらうと、まあいはばそれがこの一篇のねがひでもある。

(1) 關家厚太郎

投書雑誌Sの連中から同志を糾合して同人雑誌Rを出した發頭人であり編輯人であり結局、叔父さんだか伯父さんだかの家に寄寓して、亡父の遺産じみたなにがしかを雑誌につぎ込んでしまひ、もう少し續けてゐたら何とかなり相な處で（事實、掲載の作品がちよい〳〵世評にのぼりはじめ、外部からも寄稿があり、その中に、今は相當なものである高見順などといふ名もあつたのだが）途切れてしまひ、その後も僕の上京の度に逢つてゐたが、今から五年ほど前、年賀狀が戻つて來て、それ以來消息不明となつてしまつた。おとなしい、しかもしつかりした若ものであつた。松竹で募集した脚本に當選、金千圓也をせしめ、保險屋になやまされたあげく、東北の温泉へ避難したり、競馬へ、板草履をつかけて出かけたり、友人の赤ん坊とまる一日遊んでゐたり、僕の詩稿を方々の雑誌へ持ち込んで不調になつたのをいきどほつてよこしたり、そんな男。いまでも王子區あたりの何處かをコール天のズボンに板草履をはいた彼が歩いて居そうな氣がしてならない。

(2) 田上　元

Sの前に、四號位で終つた雑誌Tをこの男が、前と同じような連中を集めて出してゐた。山蔭の鳥取で二號位出し後上京して二號出したか。生田花世の家へ出入してゐたとか、ゐないとか、或る女と同棲子供が出來たのがまもなく死んだ、その骨をトランクの中に入れたまゝで何度も家を變りあるいてゐたが梅毒か何かで死んだといふことを、上京した時關家が語つてゐた。その頃はもう雑誌を出すどころでなかつたし、死亡の通知も來なかつた。一度、早稲田あたりを、關家、田上、僕、それからもう一人誰か知らと歩いた覺えがある。東京での田上はその時一度しか見なかつたわけである。鳥取時代に

B

横丁のある小さな煙草屋で――。私はヒカリを買ひに入つた。ところがヒカリはないといふのでキンシを買つて釣錢を吳れる小母さんの後を何氣なく見ると、眞新しいヒカリの箱が一個だけではあつたが置かれてあるのが目についた。最近ヒカリは極度に少ないことを知つてゐるから私は空箱かな？　それとも誰かの豫約品と一瞬考へて歸りかけた時、誰かゞ又ヒカリを買ひに入つて來たのであるが、この男は私みたいに心臟が弱くなかつたと見えて、當然の如くその問題のヒカリを强引にモノにしようと試みたのであるが、小母さんも亦當然の如くこれは豫約品であるから賣れない、と應酬したのである。そして數分間の論議の揚句、遂にこの心臟氏は空箱に非ざる待望のヒカリを見事モノにしたのであるが、その顏には意外にも滿足すべき表情は見られなかつたし、小母さんは勿論すこぶる御機嫌なゝめの態であつた、私は不幸にも弱い心臟のお蔭でものゝ見事にヒカリを買ひ損ねたけれども、敢へてあのヒカリの一箱に就いて詮索しなかつたことを、何故かしらひそかによろこびながら立去つたのであつた。

も、大阪驛で一度逢つた、それ位だつたと思ふ。細いペンで女の樣な字を書く男だつたが。唯永守一を知つたのは彼の紹介であつた。

(3) 唯永守一

山口の高商出身。やはりSの投書家、田上のTにも關係してゐた。おとなしい、色白な學究的な男であつた。はじめて逢つたのは田上から彼の勤め先を知らせて來たので電話をかけ、下宿、桃谷驛附近、烏ケ辻だつたと思ふ、そこへ出かけて行つたのである。無口なのが二人でたゞあてもなし歩きまはつた思ひ出がある。商大の何か辭書の編纂の仕事をやつてゐたのだが、何時とはなしに、どちらからともなく逢なくなつてしまつた。其頃は大阪へ出て來て間もなかつたので遠い所から電車の通りすぎるのを待つてゐるのが、如何にも都會なれぬ容子であつたのを覺えてゐる。いまは何處にゐることであらうか。

(4) 宇都木眞介

關家の雜誌Rの評論を書いてゐた男。つかまへどころのない樣な感じの男で、關家の引き合はせであつたと思ふ。東京の動坂あたりをあちらこちらと移りまはつたり、かと思ふと、何とか病院へ永いこと入つてゐたり、たしか唯物論者で、マルクスが何とか、エンゲルスがどうしたとか書いてゐたのが、暫く消息が不明になつたかと思ふと、不意に大阪の椎寺町あたりの旅館から電話をかけてよこし、行つてみると、大日本青年何とか團の一員としてこれから滿洲へ講演旅行に出かけるんだと、百八十度轉回をしてけろりとしてゐる。新京、奉天あたりから、銃聲を聞いたなどといふ手紙をよこし、かへりに神戸の僕の家へ訪ねて來、後出の赤松の家で寢てかへつたが、それ切りで、ちよちよ切れてしまつた。關家の行衞の判らない今となつては、彼の其後も亦、うすやみの彼方のものである。

(5) 赤松越郎

これも雜誌Sの投書家で、Rの寄稿をしてゐたのを、關家からのたよりで神戸にゐるときいて出かけて行つて逢つたのがはじまりである。長崎の男で何とか少尉であつたと思ふ。酒呑みで、デカタンで、その癖すぐ眼がしらをうるませる樣なところがあり、まあ一口に云つてみれば南國の人間である。或る雜誌の月評會をやつてゐるといふので出かけて行つた二回目に、どちらも大分すごしたあげく大阪へかへる僕と一緒に、その時は別れて働いてゐるといふ女に逢ひにゆくと云ひ出し、ピロードの、しかも眞赤な裏のついたマントをひつかけて、大阪驛で別れたヴァカボンドスタイルは今でも僕の目の中にある。

それから何度逢つたことであらう。一年のうちの四分の一か、もしかしたら三分の一

マラリヤ蚊に御注意

豐臣秀吉と
家康の話

松岡外相のヒットラー評に秀吉と家康を一人にしたやうな印象だつたとあるが、秀吉一日家康に對し粟田口吉光の銘刀を始め、數々の愛藏品を取出してこれで漸く天下の寶が調つたと思ふが、貴公御秘藏の寶物も折あらば一度拜見が願はしいと開き直つたので家康こゝぞとばかり、予には左樣な寶の持合せとてござらぬが、ただ我ら如き者を至上の主と信賴いたし水火をも厭はぬ士分五百騎を所持いたし候、予が命に彼ら一たび行動を起せば六十餘州更に恐るゝ敵なしと存じ、日頃天下の至寶と秘藏する次第にござる。と應たさうだが、昔楚の王孫圉が『楚國は寶を以て寶とせず唯善を以て寶とす』といつたのと似てゐる。秀吉の智勇と家康の遠謀を具へたら天下無敵だが蚊の出盛る昨今、效力無敵の稱ある雞の商標で、有名な金鳥蚊とり線香を使へば、蚊が殘らず退治でき、それこそ天下無敵の夏を樂しむことが出來ると言ふものです。（廣告）

同舟近詠

松山　前田五健

科學する心の上の神ほとけ
有閑へ電氣自動車などがあり
月まろし無駄な懐舊捨てきれず
默つとれ默つておれと母の瞳が
あご紐に頸の太さも日本兵
大體に於て講評ほめもせず
サ1ビスをしてもせぬでも此の人出
肩書はよいが講演つまらなさ

兵庫縣御影町　長崎柳秀

喉卷いていつそ風情のある女
アパ1トを借りてほれてる男と居
療養所皆ひたむきに生きんとす
とも知らず脚もはこべば金もつぎ
盗られたはスフでよかつた笑ひ聲
子を持たぬ男云ひたいことが云へ

仁川　池田可宵

一坪へ不思議な樣に芽が出たり
召され征く愛馬背中の子にも見せ
水出して砂出してサイレン待ち構へ
蝶一つしよんぼり咲いた花へも來

松江　勝谷山川兒

開いたと思へば牡丹ちよんぎられ
新婚の樂しさにあるスフタオル
セル出した始めての夜を呑み歩き
女事務十姉妹に似て唄ふなり
とんぼの目眺足になつたを知つてゐる

を逢つては喋り、喋り果てゝは文壇をのゝしり、文學の悲運をなげきしたものである。彼が意氣込んで書き上げた改造の懸賞小說の完成祝ひに僕が發起で井口（後章）と三人で居留地の支那料理店で氣勢を擧げたこともあつた。そうだ、支那料理と云へば、彼は上海にもしばらく居たことがあり、たしかその小說にも上海を書いてゐたように思ふが、小說は、舞ひ戻つて來た。

まあ僕のともだちの中で彼位の經歷を持つてゐるものもすくない。長崎の中學を出て株屋へ入り、（上海行は株屋の前か後かはつきりしない）株屋がつぶれて遊んでゐるうち、ある活動寫眞館の樂屋へ出入するやうになつたのだが、或時一人說明者、つまり辯士が急病で出られなくなつたのを、よし、やつてやれんことはなからうといふので舞臺に上つたところ、散々の不首尾。丁度あたまの上、といふから二階の一ばん前だが、そこにゐたお婆さんが、「あげんまでしてやらんでんよからうに、可哀そうに……」と云つたといふ。それをきいて何糞と發奮して（?）辯士になつたといふのである。僕との交友時代はだからそれから數年經つてゐて、もうおしも押されもせぬ一流どこになつてゐた。神戸S館へ行つたことのある人なら、彼の時代ものを聽いたことがあるにちがひない。主任の次ぐらいだつたらうか、相當の給額だつたと述懷してゐたのだが、女の家とのあひだがうまくゆかず、おまけにトーキー時代になつた爲に、妻子を女の實家に預けて上京した。二年ばかりして突如として神戸に現れた時には、政友とか民政とか、どちらかの選擧演說の部員としてであつた。その時にも、子供に關していざこざがあつたらしいが、結局は一人で歸京したらしい。そして、その後を知つてゐるものは一人もゐないのである。風のたよりに、新宿の白十字の階上であつたある出版記念會に出かけて行つて、誰かと喧嘩をしたとか、丁度寒中であつたのに、素裸になつて白十字の前のペーヴメントに大の字になつていせいのいゝところを見せたとか、すべてどこまでが本當なのか、それを傳へてくれた男も、その風聞が何處から來たかについては、口をもごつかせるばかりである。

街に住めば

高橋かほる

迷惑な顏は祭の牛ばかり

牛の顏を見るにつけて、　文筆にゆかりある者。　牛を食すべからず。　と聞くまでから、性來牛肉はヨー食べん私に『今度かほるさんが來はつたら一ッぺん牛肉のロースを挽いて團子にして、酒しほで味つけて、　醉うてなはる時に食べさして上げまつさ』と某所のマダムにギャングの樣な言葉を聞かされ、　尙更牛肉等に食慾をそゝられてなるものか、と思ふやさきに、　ェヘン、昨今肉無し日といふ日が現はれて實に痛快ですヨ……。

しいが、何時でもガスが止まつてゐたり、質札をちらちらさせたり、鬱陶しいわいとつぶやいてゐた。

後、結婚して、その頃こちらも家を持つてゐた近くへ來て、子供も出來、これで安住出來そうだ、もう放浪ともやつと緣が切れる、としみ〴〵

(6) 井口　渡

赤松越郎の後輩で、僕と同歲。僕はこの二人と、井口の母から長崎辯をきゝおぼえた。赤松に逢つた日の數は、同時に井口に逢つた日の數である、井口の兄といふのが、

米の値も知らずに空閑地を利用
空閑地べらぼに高い豆が出來
今晩のお菜夫婦ののど乾き
野球

センターの鼻の先から昏れかゝり
恩給を二重にとる氣の竹パイプ
あみだ籤せんべいまでも賣り切れて
柔道の心得もあり御榮轉
市議二人彌次喜多式の旅に出る
神戸 潮田明坊

齒科技工室に鍛冶屋の樣な音
常會の次の間に子等食べてゐる
實踐の見本のやうな尻からげ
琴瑟相和せず總明かつ美貌
土に親しめとインテリ陽に疲れ
二枚舌使へて地位も金もあり
長野縣 高峰柳兒

高利貸その上恩に被せて居る
見合してそれきり春すぎ夏となり
國寶を拜んで賽錢忘れかけ
日の丸を仕舞つて當直日が永い
奈良縣 嶋田翠峯

常會が愈々廻る新世帶
まじないも祈禱も出來る附添婦
名古屋 鈴木可香

卒直な返事夫人の氣に觸れて
亡き姉の愛書と判る藏書票
處分する書物へ惜しい藏書票
山口縣 三原狂路

ヒョコの死子の言ふとこへ埋めてやり
轉業をした掌を易者言ひ當てる
夕立に庭の玩具は叩かれる
眼を細くする猫の術に欺される
腦病院硝子のわれたとこがあり

もと金龍館のどこやらにゐて、昔の藤原義江を知つてゐたり、旅興業に出たり、大阪で印刷屋をやつてうまくゆかなかつたり、半島人の舞踏團を經營したり、結局弟の井口もそれにつれて隨分いろんなことをやつて來たそうである。僕の知り合つた頃は、赤松の館のプログラムの編輯や廣告をとつたりしてゐた。逢えば映畫の話、文學のはなし、誰彼のうはさ位のものであつた。兄が洲本の新聞社に入つたのを追つて、彼も半年ばかり淡路島の一角で記者生活をしたことがある。椿の花の咲いてゐる洲本へ僕も一度行つたことがある。が、次は加古川で興業に關係。それから、上京したのであるが、文學の方ではうまくゆかず、戀をして結婚、そして子供が出來た。もつともその間に一度だけ文藝春秋社のオール讀物にユーモア小說が出たことがあるが、それ切りになつてしまひ、不意に又神戸へ歸つて來た。子供が二人。兄のやつてゐる半島人のレヴュー團の仕事をやつてゐたが、暮しの方はうまくゆかず、姉婿のやつてゐる仕事を手傳ふといふので上京したのがおしまひで、兄の方のレヴュー團も立ち消えとなつて、雲をつかむやうなことになつてしまつた。行きついた先も知らせてよこさないまゝ、もうそれから四五年になるであらうか。家計のたすけにと、あまり丈夫でもないのに大きな古着の荷物を背負つて商賣に出かけてゐた妻君はどうしてゐるだらう。再度の上京の時には三人目が出來てゐたが、子供達は大きくなつたことであらう。それにしても、やつぱり彼は賣れない原稿をこつ〳〵と書いてゐるのであらうか。東京で、赤松などに逢ふたであらうか。なんと、うたかたの如く消え去つたひとびとのうちで最後に僕の前から消えた彼とそは、仲間の一切の餘韻をもひつくるめて立ち去つてしまつたのではなからうか。君および、君の身邊、それから君につながつて思ひ浮べられるかぎりの前述のひとびとの上に好き日の過ぎゆかんことをねがつてゐる。

化膿症
齒槽膿瘍
齒齦炎
中耳炎
蓄膿症
扁桃腺炎
丹毒・濕疹
トラホーム
内服により化膿菌を殺滅し、根原的に短期に治癒を促進する。
廿錠 五十錠 百錠
ルジパルア錠
A 289
製造發賣元
東京 山之内藥品商會 大阪

◎北攝下河原に歸省中の岩崎柳路氏に招かれた人々。寫眞は右より（前列）松代、霞乃、丹路、路郎、美奈子、（後列）鮎美、某人、悟郎、水客、アート、艸樂、豆秋、綠雨、紫香の諸氏。

柳路居苺狩

岩崎氏夫妻が歸郷されてから、私が此新築のお宅を訪ねたのは今日で二回目である。

二階から點々と見える葱坊主は物凄く膨らんでゐる。今に葱ぐるみ刈り取られて、夫人松代さんの採配で結構なお庭が其跡へ出來るだらう。と云うのは、生垣の土臺らしい背の低い石垣が、此太り切つた葱畑を圍んでゐたからだつた。

雨があがつたので苺畑へ出た。

丹路さんはおとなしく、靴も脱がずに、畦を歩いて、收穫不良。

某人さんは其體貌までが摘み取つた苺へまでうつつたさうな。

誰が摘んだか、盛りの良い一箱を、柳路さんお手馴れのフォトでパチリ「それは來年のカットに貰つて置く」と路郎が監督さんみたいに畑の傍で踊んで云ふ。

松代さんのお母さんのお指圖でみんなは出來のよい畝を探す。箱を右手に、靴を下手に提げて、ズボンの裾をまくり上げた一行が川邊で足を洗ふ頃はもう灯ともしも近かつた。

尙當日の出席者は路郎、綠雨、美奈子、かほる、艸樂、丹路、自由朔、悟郎、豆秋、水客、紫香、潮花、某人、アートの諸氏であつた。（霞乃）

苺摘み前も後ろも知つた顔 鮎美
新築のかほり諸共よばれすぎ 自由朔
皆んな童心にかへり苺の土を 水客
ふむ
いちご狩牛が一匹キヨトンと 豆秋
ね
二三人酔ふて新築お茶屋めき 艸樂
飛行機の滑走も見る苺狩 アート
今取つたストロベリーへ光る 松代
露
新建ちの蔭に並んだねぎ坊主 紫香
いちご狩つまない方が一つ喰 同
べ
二階から見れ鮮女の白衣なり 柳路
雲低く苺畠へ靴を脱き 同
葱苺主面白さうに風に搖れ 同
バスガール此處は苺の下河原 同
放課後は苺のへたを取る仕事 霞乃
苺狩地見屋のやうにあぜを這 路郎
ひ
苺畠に迫る山々都會の子 同

一路集

募集句

慰問袋　史路選

慰問袋　みづほ
銃後なほ強し山なす慰問品　茂路
慰問袋貧乏で買へないお手紙も　靜子
　　ユリエ
　　美奈子
品不足慰問袋へ見せぬなり　同
妹の慰問袋は別な物　眞理子
慰問袋歸らぬ人のあとを追ひ　呆人
デパートの慰問袋が物足らず　天歩
慰問袋仲良し同志で詰め合せ　勝二
無事に着けと慰問袋に物を言ひ　千斗
戰線の車座慰問品を見せ　葉光
慰問袋一つ一つに日本の香
歸還して慰問袋へ氣を遣ひ
ねもんぶくろぼくのかきかたづがも入れ

川協の★★★★ページ

★北京川柳會六月例會は東魚、青龍刀、圭、林智美、黑法師、默然人、洪二、雨明、月南諸氏により六月中旬開催、近來にない盛況を極はめた由。

路郎氏の字を賞めてゐる　森東魚　默然人

★石曾根民郎氏（松本）は大政翼贊會信州文化聯盟の發起人として、鄕土文化の爲活動されてゐられるが、去る五月十八日松本市上土町清洋軒で第一回信州文化協力會議が開催された際其懇親會席上「川柳の話」と題する講演をされ多大の賞讃を博された。

★森半彝氏（堺浩）は社用で一週間北京に滯在され玉泉山、萬壽山、北海公園、天壇等の景を探勝、秦皇島の埠頭見學後山海關まで足をのばされた。又五月二十七日の海軍記念日には北清事變で服部中佐、白石大尉の指揮で我が海軍陸戰隊が名譽の上陸先登をなした太沽の北砲臺趾まで一里のみちを單獨ハイクされ紀念碑の前で執行された紀念祭典に參列された。

★麻生會長は高鷲亞鈍氏を同伴して六月七日夜行で西下、九州並びに西部四國方面へ川柳行脚をされ、各地で熱誠なる歡迎をうけ、十四日朝、歸阪された。

★佐々木三福氏（大連）は社用で新京へ出張せられ、六月十一日大連時代の古い川柳人朝倉〆多氏と會し、「白頭豕」時代の懷舊談に耽けられた由。

★北陸川柳協會主催の久留美賞句第二回領布會は盛況のうちに〆切、各々作品を會員へ頒布したが、今度久留美氏操觚界へ復活と同時に多忙なので川柳協會を解散、新たに新聞柳壇投句家を中心に川柳結社を組織すると。

★西島水樓氏　石川縣河北郡津幡町の同氏は風詩「むさしの」のグループを集め毎月一回金澤市有隣生命樓上に句莚を開き、盛況なりと。

★布哇に於いて川柳報國に盡力されてゐる古川風竹氏（布哇）は去る四月十一日飛行機で布哇島の野球見物旁々訪問されたが、其際同氏の來島を知つた同島の柳友十數氏によつて「歡迎川柳の夕」を十四、五兩日に亘つて開催されたが、同氏の川柳講話の他、川柳漫談、各自持參の句の互評等盛大に行はれた。又これを機會に吟社を創立することを滿場一致で決議、同氏が名附親となり、花園島に因み「我蛙田（ガアアン）

慰問袋スターの寫眞うぱい合ひ
髭顏も慰問袋に泣かされる
常會で慰問袋の品もきめ
慰問品一つ〳〵がいただかれ
ひげ武者も春だ慰問の女文字
家中の意見を入れた慰問品
亡き妻へ慰問袋の禮が來る
(佳)露天風呂慰問袋。タオルも來
(佳)入れ足りぬ慰問袋も親心
(佳)豐作の土も入れ度い慰問品
(佳)野戰病院慰問袋へ起き直り
(佳)花の種慰問袋へ入れ添へる

柳水　須惠夫
天秀　梅春
多地馬　抱逸
石鹿　半休
春千代　武士
彌生　千斗
葉光　カズエ
小雅子　勿來
鷄城　神樂
白柳子　久枝
千斗　半休

(佳)慰問袋あなたの好きな物ばかり
(佳)慰問袋縫ふ妻の瞳に鯉幟
(佳)慰問袋僕が書いたと子の手紙
(佳)慰問袋母には母に入れる物
(佳)慰問袋坊やの智惠も入れました
(人)入城へ慰問袋がをつかける
(人)手紙だけで慰問袋が明日になり
(地)慰問袋故國の匂ひ詰めて來る
(地)一線へ行ける袋が羨まれ
(天)クオン書慰問袋の何處へ入れう

★おことわり　森東魚先生の選「古本」が本稿締切までに未着につき、次號へ掲載いたします。(編輯局)

食後の……
胸やけ、胃痛に

ノルモザン錠は①胃中の餘分な胃酸を吸收し②胃壁を胃酸に刺戟されぬ樣に保護し③胃液の分泌量を調整する…等の諸作用により原因的の治療効果を奏する合理的の胃酸過多治療劑として評判です。

★胃酸過多、胃潰瘍、胸やけ、嘔氣
生水、溜飲、胃痛、便秘、宿醉に

(國内價格) 三〇錢・五〇錢・一円・二円・三円五〇・五円

寶發田武

胃酸過多症に
ノルモザン錠
《小粒ノルモザンもあり》

40(1)1645

あん産のために

妊娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

片瀬醫學博士遺「安産のために」冊子呈上

猶林醫學博士　推奬
片瀬醫學博士　監査

ワダカルシューム錠
大阪道修町　和田卯助商店

吟社」と銘名し、今後益々川柳に精進されることになつた。

この快ニュースは同月十九日の日布時事新聞紙上によつて報道された。

★蓬瀛川柳社では六月三日夜來北された京都富士野鞍馬氏を圍み蓬策閣に於いて川柳句會を開催。

★麻生會長は六月廿四日上京。

七★月★句★會

★七月五日(土)午後六時
★御津八幡宮
(南區八幡町佐野屋橋筋角)
兼題「狸」　麻生路郎選
「避雷針」　高橋かほる選
題「題未定」　麻生路郎選

主催　川柳雜誌社

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規 ▼用紙は原稿用紙▼文字を正確に▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

本社六月例會

六月七日　於　御津八幡宮

出席者（順不同）

路郎・一鉢・玲之介・帆船・要兒・平行・九一・健作・かほる・緣風・香林坊・翠光・晴美・神樂・斗風・鮎美・美知夫・八朔・潮花・水客・潮美・秋星・和坊・千斗・紅多呂・万的・紫香・駒志希・文雄・よしみ・ライト・春巣・小雅子・喜一・八歩・夜王・久人・彌生・南濃路・風葉・豆秋・恒明・白柳子・指洋・滿潮・彩泡・籌彦・アート・葭乃・世紀彦

席題「人妻」　互選

人妻の苦勞額のしわに讀め　健作
人妻となつてキネマも久しぶり　美知夫
人妻として妹の意見聞く　八朔
人妻の話きれいな事にふれ　秋星
人妻の少さな嘘を云ひならひ　水客
借電話する人妻の美しく　紫香
人妻としてお悔みに姪が來る　千斗
人妻の若さへ家風冷たくて　帆船
人妻と云ふ金齒で笑ふなり　春巣
人妻として臨終の母に會ひ　玲之介
人妻に團服の値をたづねられ　かほる
人妻を前にパイプを弄び　千斗
人妻同志今日は涙のある話　和坊
人妻となつた便りが來る下宿　文雄
人妻をうつかりほめて誤解され　一鉢
人妻のまだあどけない仕科する　潮花
人妻の鼻がとがつて慾があり　鮎美

席題「螢」　八歩選

螢狩り大夕立に濡れて來る　春巣
螢飛ぶ下を默々夜行軍　晴美
ピヤホールの隅で忘れた螢籠　かほる
子の唄へ螢素直にとんで來る　千斗
妹のなげき螢が死んでゐた　翠光
背の子へ螢はひとつ火をともし　九一
子を連れた夜店螢を買ふただけ　美知夫
避暑に出た軒に螢の忘れられ　要兒
螢にも㊙がある夜店　紅多呂
花火する間は螢忘れられ　健作
螢とぶ故郷孤獨の日が續き　斗風
螢一匹旅の枕へ迷ひ込み　潮花
夜店もうつきるところへ螢店　美知夫
留守居する眼へ螢籠よく光り　八歩

席題「歩く」　潮花選

サンダルの靴で女はよく歩き　美知夫
ほまれの日ほまれの足で歩いて見　和坊
奉公日歩いて參ることに決め　豆秋
半丁も歩かぬうちにバスが越し　久人
月の夜を唯あてもなく歩かされ　翠光
早立の驛まで歩くことにする　夜王
兵歩くニュース映畫の土ぼこり　白柳子
今日歩きましたとはづむ聲で告げ　千斗
ハイキングもう歩かれぬ子を背負ひ　ライト
あきまへんと駐車場迄歩かされ　八朔
よち〳〵と歩るけば母がだきに立ち　紅多呂
なにげなく歩くに女骨を折り　水客
キヤラメルよパンよと坊や歩かされ　九一
合唱の歩るけ歩けに陽がきつし　鮎美
家旅向コースこれなら歩くだろ　白柳子
あつさりと氣の合ふ同士ただ歩き　南濃路
戀人と歩けば月も邪魔になり　紫香
病人の歩けるようになつて留守　鮎美
義足して歩く白衣を追ひ越さず　平行
令嬢の氣儘少うし歩いて見　潮花

席題「瓦」　白柳子選

はる〴〵と支那から來たか古瓦　彌生
鬼瓦ビルをにらんだまんま暮れ　夜王
瓦屋の登るはしごのしなりやう　和坊
肩車子は鬼瓦恐ぢて泣く　南濃路
物干の危く立つてゐる瓦　八朔
もうすぐに市になる瓦續いてゐ　水客
國寶の瓦へ鳩はえんりよせず　潮美
炎熱を笑ふが如き鬼瓦　彩泡
尺八の流れる瓦月にぬれ　八歩
夜の瓦火事の遠さを尋ねられ　同
驟雨して瓦がきれいビルの窓　駒志希
看板屋瓦をわつて戻るなり　紅多呂
考古學瓦を拾ふ奈良の秋　斗風
家出して瓦の波を見てゐたり　滿潮
物干の下に瓦を殘される　彩泡
有難う參り瓦を寄附さゝれ　かほる
草の芽の強く瓦の間に生き　ライト
風葉
潮風へ赤い瓦と松林　水客
空襲のない日本の鬼瓦　春巣
快い音瓦屋へ五月の陽　白柳子

兼題「トリック」　豆秋選

人生のトリック毒を呑んで死に　紫香
トリックにやつと笑ふ男也　斗風
トリックとしても八階燃え盡し　滿潮
トリックと知りつつかゝる美しさ　恩泉
トリックは心の夢を見せてくれ　よしみ
トリックがやう〳〵解けた橋へ立ち　南濃路
トリックの豪華百年後の世界　帆船
トリックと思ふ心もはづんで來　恒明
トリックの片棒かつぐ好い女　夕鐘
目を皿にしてトリックにだまされる　ライト
トリックもなくニュース映畫の生てゐる小雅子　水客
トリックへ江戸川亂歩苦笑する　滿潮
豫告篇トリックらしいとこも見せ　八朔
君のトリックにかゝる札束　滿花
鮮かなトリック酒に水を割り　かほる
トリック（金魚が釣れたやうに見へ　ライト
トリックへふゝんと鼻で笑つとき　夕鐘
トリックの涙をしかも拭いてやり　豆秋

兼題「臍くり」　路郎選

へそくりをあてにされてるのをさとり　美知夫
へそくりで妻洋裁をすると云ふ　紅多呂
臍くりのあるのを空巣知らなんだ　よしみ
叱つて借りる妻の臍くり　水客
臍くりを出さうかと思ふ帶の柄　アート
臍くつて置いて夫の損に出し　白柳子
風くりも馬を買ふ程溜てみよ　籌彦
臍くりのだん〳〵減つた物價高　ライト
臍くりの分にもふれた女同志　彩泡
米を買ふ金に臍くりなりにけり　滿潮

臍くりを肌身放さぬ不倖　春巣
臍くりでズバリし好きなものを買ひ　水客
臍くりでインチキな物買わされる　夕鐘
臍くりと云ふ五圓札のしわ　小雅子
臍繰りを湯屋へ忘れてあわてさせ　一鉢
臍くりで産衣一枚買ひそへる　夜王
友情にもろく臍くり出して貸し　小雅子
臍くりは默認といふ生活むき　彩泡
臍くりの小出しはお守りさんへ入れ　紅多呂
臍くり同志善光寺詣する　鮎美
臍くりへ男だ眼をつむつとく　夕鐘
氣強くも妻臍くりに手を染めず　古林坊
へそくりの哀れアルミ貨ばかりなり　豆秋
へそくりに禮を云ふやらどなるやら　恒明
これ丈けをかくしてあつたかと笑ひ　鷹丸
臍くりを知つた女中に暇が出る　玲之介
臍くりも何時か債券買はれたり　古林坊
いざとなりやあの臍くりも出す覺悟　秋星
買物のはんばはへそくりから拂ひ　紫香
臍くりを產婆の禮に包ませる　晴美
臍くりを大事に一人死んで行き　古林坊
臍くりは昨日や今日の事でなく　翠光
珠數持つて出る日へそくりもと使ひ　美知夫
臍くりの慰問袋へ禮が來る　彌生
臍くりで妻と歌劇の席にゐる　晴美
臍くりが一寸有るので強い後家　彌生
昔知るだけに臍くり有難く　南濃路
床摺れとなつて臍くり見つけられ　玲之介
臍くりを笑ひ入齒がはずれかけ　鮎美
へそくりを生き神樣へポンと出し　豆秋
へそくりへ亭主うつかり禮を云ひ　九一
臍くりの金は財布のまゝ渡し　潮潮
へそくりに子を生ます氣はさらになし　美知夫

雜川　**廣島支部句會**（廣島）

五月十六日　於廣鐵倶樂部

大森風來子報

切花にまだ郊外の露があり　俗菩薩
退院も間近く梅と粥が出る　鷺美
たまに來た通信神經衰弱症　可學
神經衰弱父上母上樣と書き　風來子
鍵と鍵きつちり六時には戻り　露斗
共稼ぎ鍵は隣にまかせきり　鷺美
大鼾ざした鍵子供の玩具箱　伯峯
これしきの鍵へ安心して出掛け　久米雄
梅干一つ老婆へ無事な日が續き　九坡

雜川　**下關支部句會**（下關）

國弘半休報

あの二人初對面とも思はれず　大林
初對面とは見られない睦じさ　上原
初對面髮程になくよくくだけ　九呂平
初對面そろ〳〵膝が痛くなり　不川
對初面皆んな行儀の良い子供　半休
初對面故郷の話で角がとれ　古屋
初對面五月の風の通る部屋　市多樓
座布團へ淺くすわつた初對面　九呂平
母親にだけは眼帶とつて見せ　長野
圓い眼がぐつと欠伸をかみしめる　半休
言ひ勝つてふと不機嫌な眼をさとり　不川
花すでに眞夏に近い日に弱り　市多樓
拍手萬籟花の中から挨拶し　勇記
花瓣と共に屆いた慰問文　蘭京
魚釣つて戻つた籠を派手に置き　市多樓
出る時の勢ひ何處へ魚釣り　大林
釣籠をのぞき隣へ席をとり　九呂平
釣竿がぐつと曲つた周章よう　半休
病弱が糸を垂れてる五月晴　勇記
釣り馴れた岩へ結局戻つて來　市多樓
欠伸などしては居られぬ旋盤工　山彦
するだけはした安心の欠伸が出　忠志
欠伸ふと忘れた事を思ひ出し　同
欠伸した子が次々に床へつき　九呂平
朝風へたれに遠慮のない欠伸　田中
重傷へ水一口を鬼になり　鯛好坊
双六へ父醉ひ冷めの水が欲し　市多樓
强行軍だん〳〵水筒輕くなり　伯峯
かむらせて母が喜ぶ鐵兜　古屋
遺兒二人戰地を偲ぶ鐵兜　靜月
鐵兜無い子が支那の兵になり　忠志
鐵兜玉がかすめたなと思ひ　市多樓

雜川　**岡山支部句會**（岡山）

鈴木九坡報

銅像がまだ生きてゐる村役場　玄々洞
銅像を仰ぐ團體疲れて居　ユリエ
銅像の見下してゐる甘酒屋　眞理子
銅像を見上げて下すバスケット　水客
銅像は青葉の風の中に立ち　水客
空の青さに氣付く銅像　某人
銅像を見せて電車は急カーブ　鷄城
銅像の裏の陽蔭で汗をいれ　水客
何時來ても何時來ても銅像怒つてゐ　灯竿
地圖にない小川で道がさへぎられ　眞理子
一等車地圖の見方も變つてゐ　鷄城
地圖出せば茶店の親父嫁を呼び　同
地圖を取圍んで小役人しやべる　久米雄
お遊びに來て下さいと地圖をかき　同
バルカンの地圖へ講義が脫線し　ユリエ
地圖白く參謀本部灯ともせり　水客
鉛筆を置いて速記も拍手をし　眞理子
日曜の椽に色鉛筆と子と　久米雄
鉛筆の遺書へ未だ見ぬ母が在り　九坡
英靈に出會ひぬ雨の驛靜か　眞理子
雨上り安心をした人の列　灯竿
雨の休日三體千字文開き　ユリエ
初戀はきれいな雨を見て歩き　風來子
雨の日の素足冷たく春が逝く　眞理子
雨はあがりぬ飯櫃を洗ふ音　某人
町内に女ばかりの家が建ち　風來子
町内を鷄がおびえず通り拔け　某人
町内の顏役といふ下駄をはき　九坡
町内にもめごとがある下駄の音　風來子
耳の垢ハアヽと笑ふほどの量　某人
耳垢へ他人の母のおもひやり　灯竿
耳垢を吹けば五月の風へ乘り　九坡

雜川　**尼崎支部句會**（尼崎）

酒井美知夫報

福引はマッチと箒だけに見へ　八櫻
庭箒お客の袖へ一寸とふれ　寄與史
グランドがチト廣すぎる竹箒　美知夫
寄宿舍の箒はいつか數がへり　同
言譯けも出來ず殘業へ縛られる　綠翠

雜川　**渚支部句會**（大阪）

創立二周年記念
潮花氏昇格祝賀

六月八日　濱本みのる報

慰問文銃後で流行る唄も書き　紫月
流行つ妓すがほの書は繪を習ひ　水客
野戰風呂星とぶ山の端くらし　紫月
風呂へ來て泳いで見たい子に困り　潮美
風呂洗ふ音籐椅子で聞いてゐる　風葉
テッポ風呂馬穴の水でうめてくれ　一笑
貰ひ風呂熱いと云ふに焚いてくれ　帆船
風呂のまど三日月さまは濡れてゐる　鮎美
嫁ぐ日の風呂母親がたいてくれ　潮花
來客へ一番風呂の湯がたぎり　紫香
勝手口女中の兄と云ふ男　水客
勝手口以前の女中尋ねて來　一笑
長男の無心が來てる勝手口　うしほ

みつ豆へおかつぱ同志笑ひあひ　一笑
みつ豆を食ふに仕科のある女　風葉
三杯目のみつ豆彼女はたひらげる　初美
みつ豆も御時勢ですの甘さなり　万的
みつ豆に浴衣の袖をまくりあげ　鮎美
打ち水のホースを出した勝手口　紫月
勝手口八百屋の長い愚痴をきゝ　帆船
涙に立つ日傘はきつい陽をはじき　潮花
夏の蟲手につまゝれてひげをたて　鮎美
丸刈とハッキリ云つて目をつむり　帆船
丸刈になつて帽子へ紙をつめ　ライト
出發のまぎは丸刈だと判り　鮎美
榮轉ときまりみんに惜しなまれる　和坊
榮轉の日の佛檀に灯がともり　ライト
海ひろ〳〵榮轉の船にのり　紫香
榮轉へ妻子を連れてゆけぬとこ　夢路
榮轉に母は昆布茶を入れに立ち　かほる
榮轉の官舍は螢などもゐる　風葉
榮轉はこんな空氣の惡いとこ　みのる
榮轉ではあるがさみしく故郷を發つ　万的
記念樹へ一鍬土をかけただけ　風葉
記念日へ祝電束になつてくる　紫香
記念日へ國旗の竿をふりて立て　花笑
記念品そのまゝ持つて撮る寫眞　うしほ
記念品選手のどれも涙ぐみ　潮花
記念日を折目正しい服で出る　ライト
記念樹の今は屋根より高くなり　初美
記念品埃をはらふ母の辯　鮎美
記念句碑愚師は皆にいたはられ　和坊
記念カップ金製であつた事を悔ひ　潮花
記念品へ社名れい〳〵しくきざみ　葭乃

雜川　**布哇支部句會**（布哇）
四月二十九日　於日布時事樓上
前山北海報

日系は新角度から見直され　風竹
圭角のない模範社員で終りさう　同
街角へきつと消え去るスローキッス　北海
魚屋も日米論をひとくさり　草一郎
角立てゝ言ひ合ふ夫婦とはなりぬ　魔花麗
曲り角とても似た人ばかり來る　草一郎
ちやんばらは角を廻つて太刀合せ　伯樂
倦怠期目に角を見て弱りなり　羽山

リンドバーク大佐辭任

西洋の耳も忠言寄せつけず　風竹
女房の高給をとる不偉　魔花麗
三月になつて借金しはじめる　同
一世の秋凋落の葉もまばら　無有
思ふだけ泣けよ笑へよ月朧　一涙
去る戀に來る戀がありそれでよし　同
兵兒帶になれば社長も人間味　同
よし〳〵といふては父のよく忘れ　北海
材料の割には不味いお手料理　同
戰爭は良いものだなあ儲かるよ　伯樂
非常時にストライキとはアメリカだ　同
御時世だヤードを掘つて種を蒔き　同
何事もお任せしてる氣の安さ　快夢起
月掛の車元利を乘せて行く　同
櫻々と憧れて來た二十年　友郎
淋しさをぢつと見つめるビアの泡　同
松岡は小田原評定を嫌ひなり　芋作
懸け聲で相撲に勝たすつもりなり　同
英國の爲に國家を棒にふる　松籟
參戰か不戰か米はにへきらず　同

雜川　**堺支部句會**（堺）
村上角堂報

遺兒列車富士へ萬歲して通り　銃人
遺兒部隊感謝の涙浴びて行く　波夢造
遺兒ここにあり翻翻と鯉幟　豆秋

正行も正時も出よ遺兒部隊　英太郎
若死も父に似るかと案じられ　葭乃
土俵入り化粧褌の裏を見せ　詩朔
金星の力士流石に照れてゐる　銃人
兒さんの休み相撲の手を敎へ　かほる
土ついた相撲笑つて土俵下り　角堂
まああんな痩ぎしもゐる土俵入り　葭乃
濡れた儘取組直す濱相撲　英太郎

八日目双葉山の負けを聞いて

九枚目の優勝額にしゆみがつき　霞舍
前戰の相撲褌が足らぬなり　詩朔
大相撲アナウンサも立つて居る　波夢造
近道の廣つ場今は通られず　一角
白足袋でほうれん草の種子を蒔き　豆秋
休閑地綿花の種子も二三粒　神樂
休閑地いつち無難は葱を植ゑ　波夢造
速達を子が持つて來る休閑地　喜堂
產聲に少し笑うて菓子を取り　角堂
產聲に偉い〳〵と國の母　かほる
產聲に又チケットの數がふえ　英太郎
落ち付かぬ二階へとどく孤々の聲　詩朔
產聲に明日の日本を託せられ　貴志子

雜川　**日和佐支部句會**（德島縣）
濱田賢次報

歸省の子父さんよりも背が高い　雷童
勤勞の奉仕役立つ夏休み　不明
海水着買つてまつてる夏休み　由一
夏休み最後を惜む顏と顏　進一
除夜の鐘鳴れば名案いらぬなり　山水
名案のうかんだ時は濟んだ後　由一
名案も出す純情な氣で生きる　賢次
約束へ父の意見を捨てて行き　同
日和佐川此青春は二度となし　海堂
さびしさを生んで流れる日和佐川　由一
日和佐川今日も不漁か八ツ當り　英昭

雜川　**早鐘句會**（大牟田）
五月卅一日　多田市多樓氏歡迎會
高田抱逸報

初對面直ぐ打ち解けた同じ趣味　路村
雰圍氣も親しみ易い初對面　十四之
初對面知らず〳〵に四角ばり　三郎

初對面訛訛を問ひかへし　龜水
寫眞とは別な氣もする初對面　抱逸
印象を殘したいような初對面　一葉
遠緣と聞かされてゐる初對面　十四之
靖國の父へ生れた子を連れて　龜水
助産婦の腕へ吾子が聲を立て　進
初對面木芽の匂ふ部屋明し　抱逸
紹介狀至誠のこもる筆の趾　逸茂
紹介へ趣味の野球もつけておき　映三
祖父ですと紹介される年となり　眞佐一郎
日の丸の前で閣下と引合せ　平人
人望も優り紹介者の誇り　天秀
「紹介手當」母の湯治へたしてやり　梅春
紹介へ「ラバー」を從妹にして失ひ　藤樓
首切れた同志紹介所で出會ひ　蝶人
紹介の手當が浮いた月もあり　初舟
紹介狀油だらけの手に取られ　市多樓

大阪市電氣局 川柳大會抄（大阪）

配給は子供の知つた事でなし　小柳子
配給へ金の苦面で困るなり　夢想
配給の順遺家族を先にする　青鳥
配給を手傳つてゐる隣り組　翠芳
毎日のやうに配給聞きに行き　ライト
配給の米の質にも運不運　芦穂
配給の列へスパイの目が光り　小雅子
配給を賣るだけ賣つて戸を閉ぢる　ゆきひろ
役人のやうに口きく配給所　皆洋
配給を知らせに歸へる男の子　かほる
配給の聲かけられた臺所　逸人

松坂倶樂部句會（大阪）

五月四日　石井白面人報

あの山莊いつも土曜に門があき　美根子
土、日とだけが本宅住ひとか　普天
お天氣は崩れませうと土曜の夜　白面人
土曜日と氣づく役所の表門　同
土曜ですか病人明日を淋しがり　生々庵
どうせ明日朝る土曜日の無精髭　同
雨未だ止まず土曜日更けに更け　孤鋒
地圖一枚買つて土曜日をかへる　同
おばあちやんまだ午ドンや云ふてはる　同
カバーした本だ土曜だ女事務　同
土曜日の寢床で騷ぐ子と騷ぐ　同
土曜日の金庫はあかいうちに閉め　同
借金とり羽ばたきをしてとんで來る　美根子
證文を枷に娘をいやがらせ　同
裏書を賴む洋室明る過ぎ　同
巧妙に借り出して來る妻の腕　同
もう貸せとも云へず貰ひにやつて來る　普天
成功の元は借金した話　同
高等官學資の借りがまだ殘り　同
內證の借金を聞く名士の死　同
「返します」たとへ藝者にならうとも　恒明
又來たと借金取を子が知つて　同
證文に値が出るほどに偉くなり　白面人
出世して昔の借が世に知られ　同
金借りにゆく日燈明などあげる　同
貸し度いのは借りに來ないと支店長　同
金持の愚痴聞かされて云ひ出せず　同
借金で有名になり飯が食へ　同
限定相續父の書齋を整理する　孤鋒
いゝ身分いまだに誰か貸して呉れ　同
執事もう小さい借金まかされる　同
社長さん今度もうまく借りて來る　同
回數券一枚返へす賑やかさ　同
公證人借手の方を向いて讀み　同
萬のつく借金をして一寸飲み　同
先生は月賦で拂ふ借があり　同
生き甲斐は借金出來る間だけ　生々庵
死ぬ時も借金王の派手なこと　同
研究室借金は妻子にまかせとき　同
貸す方も血の出る樣な金を借り　同
借金へ日限などを初手はきめ　同
借金のかたゞと娘知つてゐる　同
借金をこの月給で割り切れず　同

五月十八日

次の代の事など思ふ葱坊主　アート
葱坊主會直ツ直に伸びました　同
卽興詩子供と遊ぶ葱坊主　孤鋒
五月雨に一本折れた葱坊主　同
恩給で暮らしてる樣な葱坊主　生々庵
葱坊主鋏をもつて來たくなり　白面人
葱坊主茄子やトマトに見返へられ　同
葱坊主横にひら家が立ち並び　路郎
葱坊主若い夫婦に放つとかれ　同
葱坊主そのまゝそこを引越され　同
もう蚊帳をつりやぼつぼつ出て來たで　恒明
結局はたゝかれて死ぬる蚊のいのち　生々庵
蚊のゐない溫泉を三日目で飽きてゐる　白面人
郊外の證據二月に蚊が出て來　同
蚊はゐないけれど食ひもの不美味いと　同
標本になるとみんなに見られる蚊　孤鋒
母として起さぬ樣に蚊を叩く　同
廣東の蚊はこんなだと軍事便　同
蚊柱の下で借金取に會ひ　路郎
負將棋王を逃げ〳〵蚊をたゝき　同
お茶當番小使室へ走つて來　白面人
お茶だけと知つて茶店の無愛想　同
誘はれたお茶が誤解のもとゝなり　同
お藥の時代もあつた茶の歷史　孤鋒
竹籔が切れて茶畑またつゞき　同
お茶だけで歸つても呉れさうでたし　恒明
お紅茶と上品さうな口をきゝ　同
寒かつたでせうとお茶を入れて呉れ　同
新入社その日はお茶を出して呉れ　同
來朝者一度は坐るお茶の席　同
押し合つて行く心齋橋に茶の香り　同
表面は茶の會にして兩巨頭　生々庵
ほんの茶漬けですと山海の珍味なり　同
俗人は家の番茶を戀しがり　同

成金が身の程知らぬお茶を點て　同
銚後にもこうしたゆとり茶つみ唄　同
女師匠晴れの茶席に手が震ひ　普天
茶と花で生き拔かんとの未亡人　同
祖母さんが坊やを茶好きにしてしまひ　同
女事務御茶當番は御免です　同
引退のぼつ〳〵茶など初めたり　同
喫茶店もう此年齢でねばり兼ね　同
藝で立つ名妓のお茶を引く時代　同
㊗の秣茶茶碗で味が出す　同

阪大川柳會（大阪）

丸島利生報

金佛とあなどられてる海水着　柳秀
地藏尊ランデブーとは知らぬなり　同
地藏尊こやしのかざに馴れ給ひ　同
濃までは未だ半道の石地藏　たけを
佛像の偽造と知れてから憐れ　同
箸紙に征きし我が子を太く書き　柳秀
病みてある母の寢嵩の低き日日　同
山を買ふ話黒潮列車走る　春巣
出養生經濟市況だけは聞き　同
御見舞へ一櫛あてゝ女逢ひ　柳秀
婦人會おぐしをほめる人が寄り　たけを
髮結の口から知れた二號さん　同
隣組へ白髮染まで敎へられ　同
はげ方の話がはづむ社長室　利生
はげる話氣になる年となりにけり　同
髮分けて今朝も出るなり使はれに　同
母さんになつて斷髮まだのびず　同
國賊のやうにパーマは嫌がられ　同
なでつけてゐた手でうける檢溫器　路耶
國寶といふ佛像のお手があり　利生
國寶の佛の足を觸つてみ　水虹
鐘の音を佛像遂に聽きあきる　同
大佛はひどく寫眞がお嫌なり　春巣
武運長久のよだれかけした地藏尊　同
商賣に出るのに花見かと云はれ　たけを
そんな手もあるへ入試はあわてたり　同
電話口及第同志の聲となり　同
合格のその日帽子を着て戻り　利生
笛吹けど踊らぬ子等をもてあまし　同
尼さんの頭と顏をジット見る　芳一
髮つぶさはりまんねんと舞妓寄りつかず　青一路
大學を出るとそろ〳〵禿げ初め　同
若禿を苦に病んでゐる支店長　同
パーマネントかけて母子は不和となり　つる女
高まげへ母前となりせなとなり　同
髮だけは親ゆづりなり濡羽色　水棹
髮だけで外出先がうたがはれ　同
征つた子の髮を持つてる母强し　同
初の髮母涙して眺めてゐ　てる女
襟脚を覗いて降る段梯子　一彌

徐州川柳會創立句會（徐州）

四月二十九日　安井ひろし報

戲馬臺は羊腸式に上りつめ　紅夢樓
黃塵の軍靴の胸に頭が下り　茶房
民團となつた徐州の砂ぼこり　槐童
風强しスフのズボンの新領事　秀人
日の丸は戰地といつた汚れよう　雨町
痛い陽を背に洋車を走らせる　ひろし

文化映畫 和具の海女

海女の呼吸魚族とおなじ泡をたて　鮎美
暖をとる海女にみどりの風が吹き　同
海女の顏のまるみ船唄聞こゆ　同

有恒川柳會（大阪）

寺井鋭々報

四月二十四日

溫室で仕上げたやうな嫁が來て　五月男
溫室の闌の値段の怖ろしさ　波夢造
溫室を出て病床に侍る花　杜丹
溫室のメロン講釋程でなし　紫葉
人柄であるが溫室育ち也　同
溫室のきうり色ほど味はなく　五遊
溫室に終らんよりは野に生きん　青美
室咲きの哀れにもまた美くしく　水棹
溫室もプールもあつて胸を病み　同
溫室を出れば小さな畫の月　鋭々
溫室を出る頃花の名は忘れ　同
定量は突出しだけで飲んぢまひ　五月男
突出しの間しやべつて女將行き　波夢造
附出しとビールで濟ます幹事會　杜丹
つき出しで先づ祝盃の歸還兵　紫葉
するめ烏賊つき出しになる運命　青美
我が海の幸知る異境のオードブル　同
つき出しを殘りものとは露知らず　水棹
月賦まだ殘り算筯は疵だらけ　萬雷
洋服の月賦がすめば肘がぬけ　青美
月給日それとは言はぬ服屋が來　同
堂々と月賦の家が建ち並び　波夢造
往診は不幸な家を見てかへり　萬雷
來たまへと醫博の名刺出したがり　青美
婦人科は診て見ませうと平氣なり　同
横町に皮膚科と質屋つゝましう　同
往診にあらず帽子をかむる醫者　波夢造
靴わらぢ下足も人生縮圖なり　亞蒼海
寄席はねてなまこのやうに渡す靴　青美
下足番箒を持つて役がすみ　波夢造
下足取るためのお供の丁稚也　鋭々
仇討ちを見ずに下足へもう出て來　路耶
浴衣だけでも純綿がほしくなり　杜丹
日時計に時計の狂ひ敎へられ　青美
うで玉子久方ぶりの皮をむぎ　波夢造
將棋うつ二人の浴衣だけ殘り　同
老先生浴衣の膝を崩さない　鋭々

含有滋味が
もたらす元氣
ルービヒサー
大日本麦酒株式會社

◎吟行地調べ「大和寫」執筆の爲奈良生藤郎路師を去る五月十九日岩崎柳路夫妻同伴で奈良觀光課佐野造三氏の案内で、唐招提寺の圓層撮影をされたが、其際傳井福氏と共に物見櫓に上られた。（寫眞は右より）三人お代松さんと一人おいて長谷川岬氏と偶然出會ひ、一行一緒に帰阪された。（氏雨線・氏雨郎路・師郎路・奈良觀光課佐野氏・美奈子さん・柳路・氏路・師郎路・氏良觀・谷開念上大阪驛前大田前の守奈良の氏見櫓を撮影された。）

柳界展望

催

▼川柳雜誌社例會は六月七日午後六時から御津八幡宮に於て開催。▼松坂倶樂部麻生路郎川柳講座は六月一日午後一時、十八日午後一時。▼有恒倶樂部川柳講座は第一回例會は麻生路郎師旅行の爲十九日に變更、尙同講座では金岡陸軍病院慰問川柳句會を廿一日午後二時より同病院に於て開催。▼川雜廣島支部では六月十二日西川三味氏を福岡へ送るの會を開催。▼川雜豐中支部では六月十四日夕螢狩の句會を催された。

消息

▼西田艸樂氏（不朽洞會員）は六月七日唐招提寺に於いて近畿本艸會百回例會を開かれた後、開山鑑眞忌に詣でられ、物故會員の法養を營まれた。▼岩崎柳路氏（不朽洞會員）は云る五月初旬松代夫人同伴で十年振りで歸省され内地各地を旅行されてゐるが、六月六日北海道より「當地に二、三日滯在中異つた風色に句嚢を一ぱいに滿たしました」との通信があつた。▼魚住滿潮氏（不朽洞會員）は餘暇を利用して六月十二日來阪された。▼植山九天氏（不朽洞會員）は六月初旬來阪された。▼多田市多樓氏（不朽洞會員）は餘暇を利用され去る五月三十一日川雜大牟田支部を訪問された。同支部では盛大な觀迎川柳句會を開催盛況を極めた。

弔

▼黑木芳泉（廣島）の母堂は六月一日永眠された。尙戒名は尼定游、享年五十九歳。

轉居

▼玉井彩泡氏は大阪市港區市岡元町二丁目一二伊見佳方へ▼大西光陽は奈良縣五條驛前五條酒造株式會社へ▼押谷たけを氏は大阪市西區江戸堀下通五丁目五二へ▼市場沒食子氏は大阪市東成區新今里町四丁目九九へ▼弘津柳慶氏は朝鮮全北全州地方專賣局私書函第十一號へ▼生方敏耶氏（當誌客員）は東京市板橋區志村清水町四三九へ▼三鵜美笑氏は羅津府埠頭ビル二階滿鐵出計組合羅津支部へ▼中村對州坊氏は大連市若狭町一六〇へ

改號

▼平井瀧川氏（大阪）は流舟に。▼道廣御泉氏（大阪）は世紀彦に。▼和久双葉氏（大阪）は洞人に。

正誤

▼前月號近作柳欄（一四頁）に尾崎保柳とあるは緣柳の誤りにつき訂正す。

★社の廻覽板

▼渡邊曉童氏（普天氏紹介）月原宵明氏（曉童氏紹介）矢野赫堂氏（曉童氏紹介）高田抱逸氏（市多樓氏紹介）篠山籌彦氏（普天氏紹介）が今度新らたに不朽洞會に入會された。▼松井圓坊氏は家事の都合で不朽洞會退會。▼金政細泉氏は病氣のため渚支部幹事を辭退された。後任幹事は濱本みのる氏。▼川雜大洲支部（愛媛縣）が新らしく設けられた、幹事は今川椋影氏。

★★★

★★社關係の人々★★

主幹
麻生路郎

賛助員
池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　藤村作　藤本卯之助　顕原退藏　淺田一　末弘巖太郎

客員
鳥山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　亀井晟修　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　高尾亮雄　生方敏郎　窪田銀波楼　山本雨迷　安川久留美　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　寺井鋭々　大西八歩　高澤一浪　戸田孤篷　石井白面人　川出美根子　中島生々庵　小畑自由朔　倉普天　古川風竹　前山北海　古川魔花麗　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　★北山梧郎　姫田夕鐘　村松夢裡　市場沒食子　吉田水車　妹尾八九満　須崎豆秋　春元紀太　西村孝之　宗男次　森風來子　大森玉井彩泡　鈴木九坡　後藤見灯　宮岡白峰　石曾根民郎　中西むさむ　原史風　正本水客　黒川紫香　岩崎松代　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　増元翠陽　酒井斗風　北川春巣　布施筑川　小林穐舎　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾桑　多田一波　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住滿潮　岩本雀踊子　清水友帆　石野秀雄　清水史路　清水白柳子　西川愁水　中内翠芳　多田市多樓　濱田賢次　森玉井彩泡　大森風來子　宗男次　渡邊曉童　矢野赫堂　月原宵明　高田抱逸　篠山籌彦　植山九天　西川青美　夷一笑　鈴木石鹿　川早鐘會（大牟田）抱逸　大洲支部（愛媛縣）椋影

不朽洞會員
橋本綠雨　高橋かほる　福田山雨樓

支部と幹事

道頓堀支部（大阪）萬よし　函館支部（函館）晟修　梅田支部（大阪）鮎美　簸川支部（島根）綠之助　鳥取支部（鳥取）鐵州　松山支部（松山）耕一路　天王寺支部（大阪）八九滿　鶴町支部（大阪）双虎　御池橋支部（大阪）いわを　松江支部（松江）山川兒　大鐵局支部（大阪）水客　西條支部（愛媛）英賀夫　城南支部（大阪）申仙　今治支部（今治）文庫　川光笑會（大阪）里十九　竹原支部（廣島）芳耶　廣島支部（廣島）風來子　豐中支部（豐中）紫香　下關支部（下關）半休　北鮮支部（羅津府）美笑　蒙彊支部（張家口）柳路　上海支部（中華）天作　鐵道病院支部（大阪）春巣　渚支部（大阪）みのる　四ツ橋支部（大阪）翠芳　布哇支部（布哇）覺花麗　堺支部（堺）角堂　岡山支部（岡山）九坡　尼崎支部（尼崎）美知夫　日和佐支部（德島縣）賢次　川雜早鐘會（大牟田）抱逸　大洲支部（愛媛縣）椋影

募集

第十八卷 第九號課題
七月廿日締切（十句以内）
狸　前田五健選
小包　吉田水車選

第十八卷 第十號課題
八月廿日締切（十句以内）
滿員　岩崎柳路選
空壜　須崎豆秋選

第十八卷 第十一號課題
九月廿日締切（十句以内）
地圖　大島濤明選
獨立　石曾根民郎選

毎號募集（毎月五日締切）
近作柳樽（雜吟）　麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定
▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書（川柳雜誌原稿）と封筒に朱記の事。
▲締切は嚴守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

規格判B列5號
川柳雜誌　第十八卷 第七號
毎月一回一日發行

定價
一冊　㊟　金三〇錢（送料一錢）
半ヶ年・六冊　金一圓八十錢（送料六錢）
一ヶ年・十二冊　金三圓六十錢（送料十二錢）
外國送本には海外郵送料實費の加算を乞ふ
御註文はすべて前金で願ひます。振替（大阪七五〇五〇）又は小爲替を御利用願ひます。御註文は何月號よりと御指示願ひます。轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十六年六月廿五日印刷
昭和十六年七月一日發行

禁無斷轉載　本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

廣告
本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社廣告部へ御一報下さいますやう。

發行所　川柳雜誌社
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
振替（大阪七五〇五〇）
電話土佐堀　三三三三番　八一六三番　八一六四番
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
編輯發行兼印刷人　麻生幸二郎

賣捌書店
（大阪）福音社　百貨店書籍部　明文堂　朝日ビル書店
其他市内各書店
（東京）東京堂（神戸）米田寶文館（函館）石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

海

甲子園
香櫨園
海水浴場

七月一日開場

阪神電車

髮の美は
げに日本の姿なり

フケ・カユミを止め白髮・若禿を防ぎ明朗な青年美を創る

伊豆椿ポマード

伊豆椿香油本舗

大槻彩芳園

ガラス壜代用
紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市住吉區崎町通一丁目四〇番地

二葉屋商店

電話事務所用 天下茶屋 四一〇四番 戎 四三〇二番

菊正宗

株式會社 本嘉納商店

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）　昭和十六年六月廿五日印刷納本・昭和十六年七月一日發行

SENRYU ZASSHI

Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

りとびきに

美顔水

ニキビ

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子力のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

▼ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ゼヒお勸したい藥です！

▲定價一瓶四十五錢・六十五錢・一圓三十錢。全國藥店にあり

ニキビ・吹出物に
是非此藥

東京・大阪

桃谷順天館

錢壹料送　錢〇三金價定㊞　誌雜柳川　NO・210